

## 多様な人材育成に関する万国津梁会議（第4回） 議事録

日 時：2022年3月4日（金）13:00～16:00

場 所：オンライン開催

出席者：

【委 員】宮平栄治委員長、平良一恵副委員長、有木真理委員、  
鯨本あつこ委員、新崎盛信委員、平田大一委員、喜屋武裕江委員、  
金城伊智子委員、小島肇委員、山崎暁委員、上地哲委員（11名）

【県企画調整課】照屋健一 班長、

【事務局】上江洲

（事務局）

定刻の時間となりましたので、これより、多様な人材育成に関する万国津梁会議の第4回、最終の会議を開催したいと思います。本日も3時間の長丁場となりますので、よろしく願いいたします。では、こちらにございます会議次第に沿って進めていきたいと思っております。

まず初めに、宮平委員長からご挨拶をいただければと思っております。宮平委員長、よろしくお願い申し上げます。

（宮平委員長）

よろしくお願い申し上げます。委員の皆様方、年度末のお忙しい中ご参集いただきありがとうございます。おかげさまをもちまして、予定にはないような何度かのヒアリング等でお考えをお述べいただいた結果、大枠の形ではありますけれども、章立ての方向性と雛形というのが見えてきました。これもひとえに、委員の先生方の知見或いは様々なご提案のおかげだと思っております。本日の会議をもちまして沖縄県が多様な人材育成に関する万国津梁会議は最後ということになりますが、素案を作成しました。それをご覧いただいて、齟齬がないような形で、また修正等をお願いしたいと思います。それでは、始めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

（事務局）

宮平委員長、ありがとうございました。それでは、初めに最終報告（案）について、事務局の方から説明させていただきます。こちら大きく、まとめのイメージ案、目次・最終報告、今後の進め方。結論から言いますと、まだ未定稿な段階でございますので、今後も今しばらくおつき合いいただくという、その進め方について、改めて説明させていただきたいと思っております。そのあと意見交換の方で、宮平委員長の進行のもと、意見交換をしていただけたらと思っております。

では早速ではございますが、最終報告ですけれど、これまで第1回から第3回まで、さらに加えて2回の個別ヒアリング等々を踏まえ、あと正副委員長からのご意見、ご助言も賜りまして、こちらに映っている形で、全体のイメージ案ということでまとめさせていただきました。大きく括っているのが、基本的な方向性といいますか、目指すべき目標のようなもので、今回、人間力という形で考えて欲しいということで知事からのオーダーを頂いたわけですが、その中でも、時間的な制約等々もございまして、委員の皆様で話し合った結果、社会人に関して特に注目をして、社会人の能力向上に向けた取組をするということだったんですけれど、もっと広い概念で言いますと、稼ぐ力だったり、さらに何で稼ぐかといいますと、幸せになるため、そこに住む沖縄県民が幸せになるためにという、そういった大きな括りがございますので、そういった意味で幸福度の向上と不幸度の低減、それに資するような提言内容にしていきたいということで、こういった大きな括りで考えております。

その中で、社会人に必要な能力とその能力向上に向けた取組というものをこれからまとめていくわけですが、そういった取組を進める中で、委員の皆様からご意見がありました「心の安定性をつくる力と環境づくり」というのは、どの分野においても、こういった取組に関しても、最低限必要な能力という認識で、これも外に出して、大きな括りとして整理させていただきました。

最初に、社会人に必要な能力としまして、こういった形で「全ての人に求められる能力」、それから「立場や業種によって求められる能力」、特別な、特殊な能力ということで、二つに分けさせていただいております。こちらは当初、内閣府の定めました「人間力戦略研究会」の整理の仕方、知的能力的要素、社会対人関係的要素、それから自己制御的要素という形で三つの要素がありまして、こちらを参考にしながら、第1回、第2回の議論を進めさせていただいて整理させていただいたんですけれど、最後の取組内容とかをまとめていく中で、どうもこの括り自体があまりそぐわないのかなというふうに判断しまして、大変申し訳ございませんが、事務局の案としまして委員の皆様からいただいた意見をこのように「全ての人に求められる能力」と「立場や業種によって求められる能力」、の二つに分けて整理させていただきました。

それを踏まえて、具体的な取組内容ということで、こちらは全ての人に必要な取組と、それ以外、教育とか社会人の能力向上に関わる組織とか、各関係機関ごとの取組について整理させていただきました。

直接的な実施主体は真ん中の方になるんですけれど、それを側面的に支援する、或いは連携していくというところで、行政に求められる支援の内容は外出しにして、側面的に対応する内容について整理をしております。

それから関係機関の連携、こちらはまた後でご相談させていただきたいんですけれど、やっぱり実施主体がそれぞれ個別で取り組むことだけではなくて、どうしても関係機関の連携もすごく大事になってくるかと思えます。ただし、今までの議論の中で、この辺りが少し、あまり意見が引き出せなかったものですから、後で意見交換の際に、皆様からご意見賜れた

らなと思っております。

そういった取組、行政の側面的支援ですとか、関係機関の連携につきましては、継続的に見直し改善を図っていく必要があるということで、留意点的なものとしまして、目的と手段の検証を絶えず行うという、その注意ポイントみたいなところを最後にまとめております。

できるだけ委員の皆様との意見交換の時間をいただきたいので、ちょっと飛ばしながら、話を進めていきたいと思っております。まず、社会人に必要な能力について、簡単にかいつまんで説明します。社会人に必要な能力でございますけれど、先程申し上げましたように、「全ての人に求められる能力」と「立場や業種によって求められる能力」ということで、委員の皆様から多くの意見をいただきました。その中で、「全ての人に求められる能力」に関しましては、さらに、ある程度、委員の皆様のご意見をグループ化すると、こういった七つの能力に分類できるのかなというふうに考えております。「自己を認識し、長所を伸ばす力」とか、「好奇心を持って目標に挑戦し、やり抜く力」、「変化に対応する力」、「人のために動く力」とか、そういった諸々のものに整理できるかなと思っております。

それから「立場や業種によって求められる能力」としましては、もう少し社会人に特化した、或いは関係機関に特化した内容ということで、例えば「アイデアを生み出し、具体化し、実現する力」、或いは「コミュニケーション能力」の中でも、特に「傾聴力」とか、「意味理解力」、「プレゼンテーション能力」とか、そういったところは、ある程度社会人に特化した内容かなと考えてこちらに位置付けております。その他情報を収集し分析する力ですとか、教える立場の人に求められる能力のような形で整理しております。とりあえず社会人に必要な能力としましてはこういった感じでまとめています。

それを受けて、こういった必要な能力を向上させるために、具体的な取組として何があるのかということで、この真ん中のところに括弧で整理させていただいております。こちらも個別にかいつまんで説明しますと、まず個別の関係機関の取組としまして、「企業等組織内で必要な取組」などがあると委員の皆様からご提案いただいたと思っております。そちらが「社員の評価制度の導入」とか、「自己開発機会の創出及び目標の明確化」、「客観的評価の実施」、「企画立案・プレゼンテーションの機会の創出」等々、六つほどグループ化して整理させていただいております。

それから離島地域等、離島地域に限らず北部とか過疎地域も入ってくるかと思うんですけど、「離島地域等で必要な取組」としましては、「地域において中心的役割を担う人材の育成及び確保」とか、「人材交流の促進」、「基礎的スキルの習得」などが挙げられたかと思っております。

続きまして教育機関、こちら高等教育機関と学校教育機関に分けさせていただいたんですけど、「高等教育機関で必要な取組」としましては「IT技術の習得」などが上げられるかなと思っております。特に理系的な専門知識も、この中に含まれる要素かなと思っております。

それから「学校教育機関で必要な取組」としましては、「非認知能力の育成手法の習得」。

近年こういった取組も文科省の指導で入ってきているんですけど、その辺りを取り組むべきだということです。

「その他異業種交流等で必要な取組」としましては、人事交流ですとかジョブローテーションとかの「人事・異業種間交流の促進」などが、委員の皆様から上がったかと思います。

それから、「全ての人に必要な取組」としては、「アイデンティティーの醸成」とか、「自己認識促進・自己コントロール力の形成」とか、そういった諸々のことが上げられるかなというふうに考えております。

とりあえず具体的な取組内容としましてはこういった形で勝手ながら事務局の方で整理させていただきました。この位置が違うとか、或いはこの関係機関に関してはこういった取組もあるかというのがあるれば、また追って意見交換の際にご意見いただけたらなと思います。

続きまして、右側の方です。「行政に求められる側面支援」と「関係機関の連携」についてでございます。「行政に求められる側面支援」といたしましては、委員の皆様から挙げてきたのが、一番同意いただけたものを一番上に挙げているんですけど、「総合的・横断的な人材育成に取り組む部局の新設」、それから「教育特区の活用」、そして「事業者の地域社会貢献活動の評価」を入れたらどうかとか、或いは「異業種交流のための助成」等々をしてはどうかといった六つぐらい、「行政に求められる側面支援」としてご意見が挙がったかと思っております。

それから、「関係機関の連携」です。冒頭の方でも申し上げたんですけど、今、挙げてきているのは、小島委員の方から「プラットフォームづくり」ということでご意見をいただいているんですけど、個別の、例えば企業組織と教育機関の連携をどうしていくのか、或いは企業組織と地域の連携、または教育機関と地域の連携をどうしていくのかといったご意見が事務局の方で拾い上げられなかったので、こういったところをもう少し詳しく議論していただければ、大変良い最終報告になるかなというふうに、事務局の方では考えております。

それから、こういった取組を行政に求められると、側面的支援とか、関係機関の連携等々を持続的・継続的に進めて、常に改善・効率化を図っていく留意点としまして、「目的と手段の検証」ということで整理させていただいています。こちら正副委員長の方からもご意見をいただいて、整理させていただいたところでございますけれども、「KPI（Key Performance Indicator）の設定・検証」を行ってはどうか。それから、最近、内閣府からもかなり言われております「エビデンスに基づく検証」をするべきだと。それから「説明責任」ですね。きちんとやった取組、行政が行った側面的支援については、必ずやった内容等々をその結果も含めて報告をします。ただこれは責任を単に行政に求めるという内容ではなくて、きちんと、やったことをすべての県民に理解していただいて、さらにより良い取組を進めるためのもの、単に行政の責任を問う内容ではないということを理解した上で取り組んでいただけたらと。あと、県の方でも、21世紀ビジョン等々の評価で活用しております

「PDCAサイクル」、こちらを回すとか、そういった取組が必要になってくるのかなと考えております。

すみません、ちょっと長々と説明させていただきましたけれど、こういった取組は別添資料ということで、最終報告（案）、まだ未定稿なんですけれど、そちらにまとめた形で整理させていただきます。ただこの報告書の内容について、「てにをは」とかも含めて、今こちらで議論するには時間が全然足りないものですから、これは追って進めていけたらなというふうに考えております。

今日が最終の会議ではございますけれど、最終報告の方がまだ十全にまとまっていないということで、もうしばらく委員の皆様におつき合いいただけたらなというふうに考えております。とりあえず今日、委員の皆様から意見が挙がりましたら、その内容に沿って、また報告書をリライト、リバイスしていきます。それを事務局が適宜、修正していくわけですが、アップデートした報告書につきましては、随時、Google にアップしていきますので、委員の皆様が時間の取れるタイミングでそちらを見ていただいて、ご確認をして、その上で何か修正、加筆等があれば、どんどん頂ければなというふうに考えております。ただし、会社、組織によってはセキュリティの関係上、SNSへのアクセスがなかなか難しいというケースがございます。そういった委員の皆様におかれましては、適宜、事務局から最新版のWord書類をメール等々で送信しますので、ご連絡をいただければと思います。その送ったWord書類を修正いただいて、またメールでご返信いただくという流れにさせていただければと思います。ちょっと突貫工事にはなりますけれど、来週の金曜日、一週間ぐらいを目処に完成予定でございます。もしかしたら、もうちょっと延びるかもしれませんが、その時にはまた適宜、フレキシブルにご対応いただければと思います。ちょっと駆け足になりましたけれど、事務局からの説明につきましては以上でございます。宮平委員長、すみませんが、意見交換の方をよろしくします。

（宮平委員長）

はい、わかりました。ありがとうございます。それでは、最初2ページ目、いきましょか。先程、上江洲さんの方から説明がありましたけれども、ご覧になっていただいてコメント等を賜りたいと思います。どうぞご自由にご発言ください。どなたかいらっしゃいませんか。では、新崎委員お願いします。

（新崎委員）

はい、お疲れ様です。事務局の方からありました通り、私の方からは、少し関係機関の連携の部分について発言させていただきたいと思います。今回、真ん中の方に具体的な取組というのがありますが、その部分を例えば取組に必要なミッションとした場合に、各関係機関が連携して支援に当たるという方法がいいのかなと思っておりまして、この具体的な取組の、例えば「企業等組織内で必要な取組」に対して、ミッションをクリアまた達成するため

に必要な関係機関の支援策としての連携を求めていった方がいいのかなと思っております。

そのためには具体的な取組の内容の、目的と手段の中にありましたKPI、例えば、どういったプロセスの部分、どういった内容をもって社員の評価制度の導入を進めていくのかとか、そういった目標数値とするのかということの、KPIを各取組の中で数値化していただいて、その達成のために関係機関が連携してプロジェクトやミッションとして関わっていただくような仕組みがいいのかなというところの認識と、あと目的と手段の中に、最終的なゴールとしてKGIの考え方の部分を少し入れていただいて、大枠の中にありました心の安定性をつくる力と環境づくりだったりとか、幸福度の向上や不幸度の低減だったりとか、そういったところをKGIとして最終的に、この各種取組、KPIを通して何が達成されたかということの認識を、今後の目的と手段の検証の方で活用いただければなというところが、一つの意見としてございました。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。新崎委員、ちょっと教えてもらいたいのですが、KGIのGはガバナンスですか。

(新崎委員)

ゴールですね。

(宮平委員長)

ゴール。キー・ゴール・インデックスになるわけですね。はい、わかりました。他にどうぞ。どなたか。はい、山崎委員、お願いします。

(山崎委員)

はい。この間の会議で、喜屋武委員だったと思うんですけど、確か長期・中期・短期というキーワードを出していただきましたよね。あれは、僕はすごく腹落ちをされていて。何度も言うんですけど、社会人になって突然スキルが変わるということはないと思うので、長い間に人間って育まれると思うんですね。思考と言動の再現性みたいな。特にビジネススキルとかで短期的に得られるものは企業研修とかで幾らでもできると思うんですけど、そもそもの思考と言動の癖付けとか、非常に人生の中で再現性が行われてしまいやすい人間力みたいなものというのは、急にスペシャリストの研修、コーディネーターがいたとしても、なかなか変えられないというところがあると思っていますよ。だから、この表現が県民に出たときに、社会人というキーワードが非常に強いと、学校は学校でまたいつもの学校教育になってしまう気がしていて、これは全部繋がっているんだということを、どうやってこの会議からメッセージが出せるかというのが、僕は大事かと思っています。その時に、この間の喜屋武委員の長期・中期・短期という表現がいいんじゃないかなと。

この社会人って、働いてる人のイメージがあると思うんですけど、なんだったら成人という言い方もいいかなと。これから18歳から成人になるわけですよ。大分変わっていくんですけども。学校教育で学生に向かっている先生とか親御さんとかもそうですけれど、ここが成人として必要なスキルなんだというのが見えながら、10代を過ごしていったらというのがすごく大事なんじゃないかなというふうに思いました。何かそんなメッセージを出せないかなと考えています。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。思考と言動の再現性は非常に重要な概念で、今おっしゃっていたように、思考は急に明日変わるわけじゃないんですよ。やはり長期・中期・短期という視点が必要かなと思いますね。あと、この社会人という言葉に、今、山崎委員の発言を聞いていて、こんなのはどうかと思ったのが、社会で生きていく上で必要な能力とすればいいかなと思いましたけれど。

(山崎委員)

はい、良いと思います。

(宮平委員長)

そうすると、今おっしゃったような短期・中期・長期というメッセージになるのかなというふうに思った次第なんですけれど。社会人となると限定的ですよ。ところが社会で生きていく上でとなると、我々は何かしら社会と結びついて生活していかないといけないわけですから、そうすると今山崎委員がおっしゃったような短期・中期・長期という意味合いも含まれてくるかなと思ったりしています。

他にどうでしょうか。ご意見をお願いします。あともう一つ、私、気になっているのは、その下の全ての人に求められる、この全ての人となってしまうたら、排除の論理になってくる可能性もあるんですよ。一部はできるのですが、全部はできない人がいるとその人は人材ではないと思われてしまったら、SDGsの趣旨である「だれ一人取り残さない」の考えに反することになります。「自己を認識し、長所を伸ばす力」、「好奇心を持って目標に挑戦し、やり抜く力」、「変化に対応する力」がすべてないといけないというふうな排除的な意味合いがないような形にしたいと考えています。「自己を認識し、長所を伸ばす力」、「好奇心を持って目標に挑戦し、やり抜く力」、「変化に対応する力」、これを全部持っていないといけないの、これらの力を持っていないとこれから人材ではない、そんなメッセージが伝わってしまったら困るなど、私は見えていて考えたんですけども、先生方いかがですか。

(鯨本委員)

よろしいですか。

(宮平委員長)

鯨本委員ですか。はい、お願いします。

(鯨本委員)

ちょっと、全ての人と違うところをしゃべろうと思っていたんですけど、全ての人のところでも、今伺いながら気になったのは、求められるというよりかは、あると望ましい力があるとしますので、そこは表現を変えるのがよろしいかと思います。求められるというか。

(宮平委員長)

望ましいという。

(鯨本委員)

望ましい能力ですよね。もちろん、できる人できない人と、できない理由があってできない人もいるかと思いますが、「求められる」ですときついですよね。

あと私からは、やはり離島地域という文言、この部分に対してなんですけれども、沖縄の場合、沖縄県の中で使われる資料で離島地域においてと言われれば離島地域だとは思いますが、例えは過疎地域、国頭とか他の地域とかも含まれるということであれば、離島地域他、小規模自治の地域、そういった少ない人数で地域を運営している地域、そういった場所で必要な取組というふうによく見てもらいたいのので、こうまとめたところで短い言葉で説明する必要があるのであれば離島地域などでもいいと思うんですけど、どこかでしっかりと、離島地域をはじめ小規模自治の運営や維持において必要な能力とか取組ということを理解できるような表現にさせていただけるとありがたいです。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。大規模小規模は沖縄県自体も相対的なもので小規模になりますからね。では今おっしゃったように、小規模自治体、小規模地域にしますか。離島を含めた小規模、離島などのとか或いは。

(鯨本委員)

そうですね。離島地域及び過疎地域みたいな形でもいいかもしれませんし。

(宮平委員長)

具体的に入れて、小規模地域、括弧で離島や過疎地域という形で。

(鯨本委員)



そうですね。沖縄県の他の会議とかでも、離島過疎地域というような言い方でもいいのかもしれません。

(宮平委員長)

そうですね。離島過疎地域で必要な取組という形にすると、いいかなというところですね。他にどうぞ。これは全体のスキーム図になっていますので、ご覧になっていただいて後でまた細かなところが出てきます。

先程の求められる、必要とされる能力の中で「学力・金融リテラシー」、ここだけが非常に具体的な文言になっているんですよね。これは非認知能力のことを言っているんですよね、学力と金融リテラシーというのは。もう少し改善しなきゃいけないかなと思いますね。はい、平田委員、どうぞお願いします。

(平田委員)

よろしくお願いします。僕が気になったのは、関係機関の連携のところになるんですけど、今プラットフォームづくりの中で1点だけ。「企業組織と教育機関の連携」、それから「企業組織と地域の連携」、「教育機関と地域の連携」とあるんですけど、例えばこの間来話しているように、那覇市教育委員会が以前やった専門家講師派遣事業みたいな形で、学校の先生たちの専門的な部分を補う、そういう専門家を派遣するという取組を、教育委員会が中心でやったりすると結構いいかなと思うんですよね。

ただし、教育委員会という言い方をするとちょっとあれなので、やっぱり教育機関と、例えば専門的要素を要する皆さんとの連携だとか、そういうような形はどうかなと。つまり、芸術家だったり或いは企業の社長さんだったり、これまでもやっていると思うんですけど、那覇市教育委員会がやって良い成果をあげたのに、意外に他の市町村は真似ないんですよ。ですから、そういう事例は結構、成功事例という形で広く紹介していくというならば。もしかして成功事例じゃなかったのかなとふと思ったりしますけれど、今話しながらドキッとしましたが、いや、そんなことはない。きっとかなり良い成果があると思います。

つまり、このプラットフォームの関係機関の連携の中で重要なことは、ミスマッチがあるほうが面白いという言葉があるみたいに、意外に異なるもの同士のせめぎ合いやぶつかり合いから新しい文化というのは生まれてくるというか、異文化の中からのせめぎ合いが新たな文化を生み出すことがありますので、沖縄的な人材育成文化を作るという意味でいうならば、異なるもの同士のマッチングというんでしょうか、ジョイントというかコラボというか、それは非常に重要なかなと思っていますので、関係機関の連携の中にぜひそういった取組はどうかなというふうに思っています。以上です。今出されている課題に関しては、僕はちょっと答えを持ち合わせていないのですが、今のところそんな感じです。

(宮平委員長)

はい。ジョイント、タックワーサーやチャンプルー文化ですね。

(平田委員)

チャンプルー福祉という言葉も今ありますけれどね。要するに、よく言われているのは世代を超えた、学童のようなところと介護施設が一緒になったみたいなこととかは結構あって、コロナでそういう機能がなかなか発揮できないというのが、逆に言うとタックワーサー文化の弱い部分ではあるんですけども、アフターコロナの後は、これは沖縄らしい取組になっていくんじゃないかなと。まさにタックワーサーができるといいなと。チャンプルーとかですね、いいなと思っています。

(宮平委員長)

はい、他にどうぞ。今のスキーム図で。ちょっともう一つ、気になるのは、高等教育機関で必要な取組、「IT技術の習得」とあるのですが、金城委員、IT技術といった場合に、どんなイメージを持たれますか。お願いします。

(金城委員)

すみません。さっきのプラットフォームづくりの方もちょっと話したかったんですけど、まず「IT技術の習得」のところ、もう少し具体的なスライドがあったので、あちらの方で発言しようかなと思っていたんですけども。IT技術と言ってしまうと結構限定的なイメージを持ってしまうかなというのは、ちょっと懸念していました。はい、これですね。こここのところで、確かにネットを使える技術とかは必要になってくるとは思うんですけども、それをIT技術という書き方をするのは、イメージ的に限定されちゃうんじゃないかなと。じゃあ、上手い言葉は何だろうというのは、もしかしたら、山崎委員の方がお詳しいんじゃないかなと思いつつ、考えていたんですけど。

あとは、「理系的専門知識の習得の場の拡大」というところで、これは別に理系学科を創設しなくても、以前名桜大学や沖国大とかで非常勤をやっていたことがあるのですが、実際にプログラミングとか授業されていますよね。情報リテラシーの授業とかがあったりするので、別に創設する必要はなくて、ただ科目として新設すればいいだけなんじゃないかなというふうにはちょっと思いました。ITに関しては以上です。

(宮平委員長)

山崎委員からDQの方が良いんじゃないかということで。はい、山崎委員。

(山崎委員)

多分、ここに書いたIT技術というのはテクノロジーが発展していくから、ある程度みんなが知っておいた方がいいよねという意図だと思うんですよ。かと言って、プログラミング

できるように全員がならなきゃいけないかというところじゃないと思うので、コンピュータとして向き合うときに、最低限、人間として知っておく必要のあるスキルというのがDQだと思っているので、これは日本が今一番国際的には取り残されているスキルだと思うので、そこは、せっかくやるのであれば非認知能力と合わせて持っているとな望ましいスキルとして推進していいんじゃないかなと思います。

(宮平委員長)

あともう一つはデジタル志向とかシステム思考、これかなと思うんですね。さっき金城委員からもあったんですけど、理系文系と分けているのは日本ぐらいなもんなんですよ。よく言われているのは、観察して、その中から共通性を見出すような観察力、それをデータに落とし込んでいくデータサイエンス、そしてそれを使っていくDXというイメージです。ですから、ここは、別の表記が望ましいと考えています。他の委員の先生方がいいかでしょうか。小島委員とか或いは有木委員とか平良副委員長とか、実際に現場で働いている委員の先生方から、もうちょっと意見を聴取したいと思いますが、よろしくお願いします。

(小島委員)

はい、名前を挙げていただきましたので。私もここはIT技術というよりは、今、宮平委員長からもありましたように、デジタルサイエンスとかDXとか、そういった分野を含むITリテラシー全般、それがDQという言葉なのかもしれないですけど、その方がいいかなというふうに思っていました。データサイエンスは今いろんな大学で、文系でも必要な能力として取組が進んでいるので、あるといいのかなというふうに思いました。あと、他の話もちょっといいですか。

(宮平委員長)

どうぞ、お願いします。

(小島委員)

先程あった離島過疎地域、小規模自治体のところの話なんですけれど、ちょっと見方というか切り口を変えちゃうんですが、どういう人材が、どういう能力が必要かということとともに、離島過疎地域ならではの必要な職業というか、そういうものもあるんじゃないかなと思っていて、わかりやすい例で言うと、離島のお医者さんをどう確保するか。今回コロナでエッセンシャルワーカーというキーワードが広まったと思うんですけど、やっぱり島で住み続けるためには、それを支える能力、職種の方というのをしっかり確保していく必要がありますし、その人たちが離島で住み続けられる、活動し続けられるような取組も必要なのかなと。それは結構沖縄の特徴として打ち出せるんじゃないかなと思っています。離島の医者については、本学でも離島枠を作って、医学部への入学や卒業後の制度なんかもあるんで

すけれども、それ以外のエッセンシャルワーカーと言われる人たちについても、何もなくても十分確保できているのであれば問題ないので、そこは確認ができればいいレベルだと思うのですが、そもそも島が外と繋がり続けるために、航空とか航路とかといったものを維持する人、特に離島航空路を維持するパイロットについては、パイロット全般が2030年問題で取り合いになるようなことも言われているので、しっかり確保し続けていけるような取組なんかも、能力ではなくて職業になってしまうのでちょっと切り口が変わってしまうんですけれども、あってもいいのかなというふうに思いました。

あと、先程来ありますプラットフォームのところですね。キーワードとして出させていただったので、ここも少し触れた方がいいのかなと思っているのですが。これ自体、文科省の方が中央教育審議会等でも言っている議論なので、特に沖縄だけに必要な、沖縄が特区としてやらないといけないような話ではないんですけれども、そもそも、大学や高等教育機関が地域にとって、地域の課題解決等を実際に担ったり、それを担える人材育成をもっとやっていけたらいいんじゃないかというのが背景にあります。具体的には、わかりやすい指摘でいうと、定員割れしている学部とか、公開講座だけれど全然人が集まらないとか、そういったもの、これは地域のニーズをちゃんと踏まえた設定ができていないんじゃないか。もっと地域のニーズに合った学部学科コースの設置や、あとは公開講座と言いましたけれども、研修会とか講師の派遣とか、そういったニーズのマッチングなんかをしっかりとやっていく必要があるんじゃないかみたいなところがあるかと思います。中央教育審議会の中では、地域のニーズを徹底的に関係者で議論しろというふうに言われていて、その上で、教育プログラムを作る、それも正直、大学の中だけでできないところもありますし、大学以外の公的機関が実施している研修とか講習会とかというのもたくさんあるので、そういうものとうまく役割を分担しながら、もしくは連携して一緒にやりながらやっていけば、人も少ない中より効率的にできるんじゃないかというような背景があるというふうに私は認識していますので、今回いろいろな、何々と何々の連携というのが、項目として分けて書いていただいているんですけれども、そもそもが関係各者が集まって徹底的にというか、まずは課題とか問題とかを議論するような場というのが必要だよなというのが、前段のプラットフォームのかなと。その上で、分けていただいているように「この部分については、こことここが一緒にやるといいよね」みたいなレベルに落とし込んでいくのかなというふうに思っています。

あと、新しい振興計画の中で、大学を活用したというか大学と連携した地域課題の解決というのが、KPIにも位置付けられています。実際、先行しているものとしては、大学発SDGs社会課題解決研究パイロット事業みたいな、ちょっと名前が長いんですけれども、があって本学の教員も取り組んでいるんですが、同じようにSDGsを考える研修とか、もしくは教育プログラムを一緒に作り上げていく、SDGsに限らず社会課題の解決を担う人材を育成する教育プログラムを一緒に作っていくというレベルですね、というのものもあるのかなとあって、そういったものがプラットフォームの中で議論できればと思っています。

あと合わせて、行政に求められる支援のところでは、今言ったようなものを徹底的に支援

してくださいというのが希望なんですけれど、私も行政にいたので「じゃあどの範囲をやればいいのか、どの範囲を支援するのか」と範囲を規定しないと、税金を使う事業になりますので整理がつかなくなってしまうんですけれども、その範囲も含めてプラットフォームで議論するというのが一つやり方としてはあるのかなと思っていますので、そのためにも、横断的に見られる部署があって、目指すべき将来像を共有する、そういう取組と一緒にやっていけばいいのかなと思いました。すみません、ちょっと長くなりましたが、いろいろな分野でちょっと気になったところ、発言させていただきました。ありがとうございます。

(宮平委員長)

ありがとうございます。今の徹底的に議論する場というのが、結局パブリックな意見を集めていって、そのような事業に税金を投じるべきであるという根拠付けになるのかなというふうに思うんですけれど、小島委員、そんなイメージでよろしいでしょうか。

(小島委員)

そうですね。やはり税金を使うのに、とんちんかんなことをやってはいけないので、税金を使ってやるからには、「この分野が足りないよ」、もしくは「こういう取組、この程度まではやろう」というような範囲づけが要るかなと思います。

(宮平委員長)

先程出ましたKPIであるとかKGIとか、そういったものを設定していくということにも繋がってきますからね。

(小島委員)

はい。それがまたエビデンスにもなるのかなと思います。

(宮平委員長)

わかりました。はい、有木委員、お願いします。

(有木委員)

最初のサマリーのシートのところ、先程、山崎委員がおっしゃっていたことに非常に共感してまして、前回、喜屋武委員がおっしゃっていた短期・中期・長期という、これはまさにここに書いてある、「立場や業種によって求められる能力」と「全ての人に求められる能力」と、あと、そもそも社会に出る前に必要な能力と別のものではないと思ってまして、ちょっとこのサマリーシートにまとめるのは難しいかもしれないんですけれど、何かマトリックス的にこの能力を、社会に出る前、社会人として必要な能力、それから立場や業種によって求められる能力と、いかに進化していくかということなのかなというふうに感じま

した。そこがちょっと私も今、うまく整理できないままなんですけれど、例えばコミュニケーションスキルみたいなものも、子供の頃から必要なものもあれば、会社に入って必要なもの、今度はマネジメントをしていくとか、接客をしていくとか、それによってまた必要な能力もあると思うので、どういうふうにステップを上がっていくかという、この整理が多分必要なんだろうなというふうに思うと、学力とか金融リテラシーみたいなものも、それで整理がついていくのかなと。やっぱりお金の勉強もきっと子供の頃から必要ですし、そういうふうに整理ができるのかなと思いました。

その延長上でもあるかもしれないんですけど、「IT技術の習得」というのも、ちょっとここに言葉が入ると、やっぱり言葉が大きすぎるなというふうに思いまして、ちょっと私が日々感じていることで、具体的なお話をすると、我々、多くのいわゆる個人事業主さんと取引をさせていただいている中で、いわゆるITリテラシーというのはめっちゃくちゃ低いんですよ。数年前まで、「インターネットとは」とか、「WiFiとは」とか、そこからご説明をしないと、いわゆる事業主さんのDX化は進められなかったというような。もちろん今、若者は変わってきていますけれど、でもベースとしてのリテラシーをどう上げていくかというところなのかなというふうに思いまして、技術というよりかリテラシーとかそういう言葉の方がいいのかなというふうに思いまして。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございました。

(有木委員)

すみません。それで、さっき、「全ての人に求められる能力」というワードのところ議論になっていたかと思うんですけど、社会に入って活用する能力とか、伸ばしていく能力とか、もしかしたらそういうワードの方がじっくりくるのかなというふうにも思いました。

(宮平委員長)

今、有木委員が進化する能力と言っていたので、進化する能力なのかなという感じがしました。進化させた方がいい能力みたいな、そんな感じですかね。

(有木委員)

学んだものを社会に出て活用していくという、活用しながら進化していくという。うまく言葉がまとめられないんですけど。

(宮平委員長)

そうですね。要するにそれぞれ人は持っている能力が違うんですけども、その持っている能力をベースにしてさらに上積みしていくような、活用しながらですね、そういったイメ

ージでお話なさっているのかなと思ったんですけどね。

(有木委員)

はい。

(宮平委員長)

だとしたら、進化活用、活用できる能力にしますかね。この辺は走りながら考えていくというのも重要ですよね。ここは、ちょっとまた後で議論したいと思いますけれど。平良副委員長、いかがですか。

(平良副委員長)

はい、ありがとうございます。私もちょっと一つ、「全ての人に求められる能力」の中に記載のある「人のために働く力」というところにちょっと着目しまして、詳細のページを拝見するとそこにボランティア活動という取組があったんですけども、やっぱり孤立させないだとか、こういう環境を作っていくという取組を、例えばボランティア活動に置き換えた場合、2ページの表で、具体的な取組内容の表の方にはボランティア活動というのを一つ明記しても良いのかなというふうに感じました。そうすると、そのボランティア活動を支えるための関係する組織だとか関係機関というのが、ちょっと今まだビジネス側に向いている取組になっているのかなというふうにも思ったので、やはり心の安定性だとか社会幸福度を向上させるというところに資する活動が、一つボランティア活動ともう一個、個別にピックアップしても良いのかなというふうにちょっと思いました。それを具現化する関係組織。組織じゃないのかな、地域なのかしら。それを盛り込んで良いのかなというのをちょっと感じました。以上です。

(宮平委員長)

ありがとうございます。上地委員、いかがですか。最初のプラットフォームの方、スキーム図ですね。

(上地委員)

この中で「小規模離島、過疎地域等で必要な取組」という中で、私自身もずっと関わっているところで、産業人材というものを育成しなければ、確かにエッセンシャルワーカーというのが必要であると同時に日々の生活を離島で維持し持続していくためには、やっぱり何らかの産業活動というのは不可欠だと思うので、ここら辺が必要な取組の一つなのではないのかなと思います。私自身も県内の全離島、それから全国の200近い地域も回っているんですけども、その中で地域の特産品や地域の産業を作っていくという取組の時に、そこが欠けているというところがあって、この産業人材の不足をどうやって補っていくのか。そう

いう地域ほどほとんど商工会地域と呼ばれるところなんですけれども、商工会の経営指導員だけでは、そこが全然補えていないので、いろんな専門家を呼んで取り組んでいるわけですけれども。ちょっと具体的になると、例えば西表島とか、南大東島の方の産業育成に関わったリュウセロの亡くなられた知念さんとか、そういう方々の離島地域での働きかけや指導というのが非常に活きたという事例もありましたので、そこで生まれてくる産業が、その地域の離島の経済発展にも繋がっているのかなという気もしています。離島はほとんど小規模事業者、或いは個人事業者が多いものですから、その産業をどう育てるかというのは、まさにその地域の生活そのものを左右していくと思いますので、そういう人材が離島や過疎地域で育っていければ、すごくいいと思うんです。

そういう意味で、関係機関との連携というところでも、いろんな企業関係、そういう事業所関係との連携というのにも必要になってくると思うんですね。その時に、商工会もそうなんですけれども、沖縄で言えば経営者協会とか、経済同友会とか、特に中小企業家同友会とか、かなり人材育成に力を入れているので、そういう経営者の団体との関係づくりというのは、とても必要になってくるのではないかなというふうに思います。

あとは、ほとんど皆さんがおっしゃったのと同じで、やっぱり「全ての人に求められる能力」というのは、圧迫感というか、強制的なイメージをどうしてもどこかに感じてしまうところがあるので、表現は何かいいのかというのは今すぐには出てこないんですけれども、ここは「求められる」という言葉ではないのかなという気はします。今のところ以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。やっぱり小規模地域とかその辺で、先程来、出ていますエッセンシャルワーカーとか中心的役割を担う人材とか、ここをどういうふうに落とし込みでいくかということですね、解決の策の落とし込みですけれども。うまくいっている事案としては、一つは徳島県の神山ワークスですかね。そこが、非常にいいことをやっていたりして。あと離島地域だと、島根県の海士町ですか。あそこは働き方についても、面白い取組をしていますよね。小さい地域ですから、どうしても専門職なんかできないので、ある時は漁協の職員、あるときは農協の職員、あるときはという形で、要するに現代版百姓ですよ。現代版百姓というものをやったりしているんですけれども、その辺について鯨本委員、知見がありましたら教えてください。

(鯨本委員)

はい。今聞きながら、来るかなと思っていました。今おっしゃっていたのは海士町複業協同組合の話ですね。やはり小規模地域ですとか、一つのスキルとか一つの仕事だけで食べていくというのがなかなか難しいという背景もあるんですけれども、ちょっとした仕事がたくさんあるというのは事実としてあるので、一人の人がいくつもの仕事をできるというような状態で複業組合というのは近年始まっていて、海士町で導入されて、そのあと沖永良部



島とか、そういったところの広がりは見えています。海士町の裏側の動きとかを拝見しているとやはりそういう仕組みづくりができる人がいたりします。しかもその仕組みを作って動かす時に動かせる人もいます。ですから、そういうとても優秀な方々がいて初めて実現している仕組みだったりしますので、そういったものを今ここで書かれている具体的な取組のところ、誰がいたらいいのかみたいなのところで言いますと、そういう優れた方がいらっしやらないといえますか、やる気のある方は当然いらっしやるんですけども、専門的な知識を有しない。そういう地域人材がいらっしやるところに対しては、いわゆる地域を運営する立場にある人、地域のキーマンとか、先程、上地委員がおっしゃった産業人材の中核になる方とか、そういう人に対して、その人が持っていない能力を持っている専門家との連携というのをつくれなかなと思います。実際、その専門家という方は本当に優秀な方が良いです。難しいんですけども、地域づくりの界限でも本当に様々な方がいるんですけども、下手にマッチングしてしまうと混乱をきたして、むしろ地域にとってマイナスな動きに発展したりすることもあるんですね。小規模地域というのは良いように動けばその効果も早く出るんですけど悪いように動いたときの効果もすごい。マッチングに関しては、国土交通省が「しまっちんぐ」というようなマッチングイベントを行ったりしていますけれども、その「しまっちんぐ」の背景でもコーディネーターという人間が、細かく地域の課題を拾い上げて、かつ反対側にいる企業の方々にお繋ぎする時の間に入るだとか、そういうこともさせていただいていたりするんですが、そういうマッチングをする時、誰と誰が繋がるという時にはその間で仲介をする人というところはまた別になってくるのかなと思っています。ですから、ここに書こうとすると長くなってしまうんですけど、今「しまっちんぐ」と書いてもらっているの、そのような動きはあっていいのかなと思います。

あと、ちょっと加えてなんですけれども、離島地域、過疎地域のところで人材交流の促進に関しては、さっきの地域人材の育成・確保と同じなんですけれども、人とか情報が集まるプラットフォームとコミュニティというのはたくさん存在しています。ですので、そういったところとの連携というのも一つあるのかなと思います。

あと「基礎的スキルの習得」というのは、さっき有木委員がおっしゃっていたように、やはりITリテラシーという点で言うと、地域の方には「WiFiってどうやって繋いだらいいの？」みたいなのところで、いまだに悩まれている方がたくさんいらっしやるんです。そういう方が集まる場所、例えば公民館みたいな自治組織の公共的なスペースと教育プラットフォームの連携とか、そういったことで地域住民が基礎的スキルを習得できるような場というのが作られるのは一ついいかなと思います。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございました。先程、鯨本委員が、マッチングする際には優秀な人じゃないと駄目というようなお話があったのですが、これは離島地域に限らず、いろんなものでも、やはりマッチングできる人が優秀じゃないと場が混乱するし、收拾が付かなくなります。

他に、新崎委員、どうですか。また振り返ってみて。いろんなところが出てきたと思うのですが、よろしくをお願いします。

他に、新崎委員、どうですか。また振り返ってみて。いろんなところが出てきたと思うのですが、よろしくをお願いします。

(新崎委員)

先程お話の中で、「全ての人に求められる能力」のボランティア活動とか、地域貢献とか社会貢献活動を入れたらどうかというのがあったんですけども、以前、事務局のヒアリングの時に、リクルートさんの方がオリンピックの時に調査をした内容で『個人のキャリアを豊かにする企業の社会貢献活動』ということで、こういった内容を元に企業さんの評価とか、職員の人事とか、そういったものの考課をつけているとあったんですけども、こういった部分を含めて、そういった社会貢献活動、地域活動が個人のスキルアップ、またさっき言った「全ての人に求められる能力」という形にするのかどうかもそうですけれども、そういった機会として活用できたらなというところがありました。

あと、先程のプラットフォームの部分、組織の部分ですけど、やっぱりプラットフォームという形式ではなくて、そういった協議をする場という認識を、今回の関係機関の連携の基本的な部分としてプラットフォームを設けていただくと、例えばプラットフォームはさっき言った小規模地域にももちろんありますし、学校の中、企業間、地域でもあると思いますので、そういった関係機関だけが集まったプラットフォーム、また関係機関を連携するだけのプラットフォームではなくて、そういった協議の場をいろんなところにつくっていくという基本的なスタンスでプラットフォームづくりというのを提案した方がいいのかなというの認識としてあります。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。ここも先程、小島委員と鯨本委員の話にもあったんですけども、徹底的に議論する上ではやはりそれを議論するためにも、様々なマナーであるとか、ルールづくりであるとか、そういったことも考えてやらないといけないかなと思います。ですからここは 2 ページ目の最初のスキーム図に戻るんですけども、やはり皆で議論していった「アイデアを生み出し、具体化し、実現する力」とか、そういったのに関連が深くなってきているような感じがしますね。とりあえず、このスキーム図は、こういった形にしておいて後で振り返りたいと思います。

次に 5 ページ目をご覧ください。書きぶりとかといったところで名前はちょっと変わりますけれども、ご覧になっていただいて、おっしゃった内容と違っているところ或いは改善した方がいいかなと思うところがございましたら、ご指摘のほどよろしくお願いします。ここは、先程、有木委員のところ、走りながら考えていって高めていければいいというところですね。ということは、まずはやっぱり自己を認識して自分の持っている長所は何ぞやと

というようなところがないというので、「自己分析力」、「セルフプロデュース力」、セルフチェック力と言ってもいいんですかね。そういったようなことですね。どうやって自分の長所とか短所なんかを理解できるんだらうかというような前提条件も考えないといけないのかなと思いますが、やはりここはボランティア活動であったり、異業種交流であったり、そういった中で、自己認識し、長所を伸ばすとか、そういったことができるんでしょうかね。その辺について、お聞きしたいと思いますが。どなたかどうぞ、ご発言のほど。はい、山崎委員お願いします。

(山崎委員)

自己認識の部分と、次の好奇心というところに関連してくるんですけど、さっきの地域連携のところと合わせて、できるできないは置いておいて話すんですけど。日本は文系理系を中学1年生、2年生ぐらいからイメージし始めて高校の時に決めちゃうじゃないですか。自分が何か好奇心を持ったときに、変えていいんだよという社会からのメッセージってすごく大事だと思っているんです。「あなたの夢は何」と言って、そんな何十年後の夢なんて、12歳とか13歳が答えられなくて当たり前だと思うんですよ。それよりも今日の前のこれが好きとか、これをやりたいという気持ちを大事にしてあげる社会のメッセージが大事かなと思っています。なので、じゃあ何が今具体的にというと、連携という時に、沖縄県全体じゃ難しいかもしれないんですけど、実験校じゃないですが、学校と学校の連携とかできないかなと思っていて、高校とかに入った時に、「普通校に入りました、専門校に入りました、高専に入りました。卒業までそこでずっと勉強します」ではなく、自分が何かやっている時に興味を持ったら、「農業高校をちょっと覗きに行きたいな」と。それが講座として取得したポイントになるのかどうか、僕、学校現場を知らずに言っているの、「お前、何言っているんだよ」という話かもしれないんですけど、でも例えば、高専の学生が情報をすごく学んでいて、「これって、ちょっと水産高校の件で交わってみたいな」という時に1ヶ月間、水産高校で学べるとか。地域で教育機関が連携したら、子供の好奇心をもっと育てないかなと勝手に思っていますという、すごく乱暴な、できるできないは置いておいて言っているんですけどね。ごめんなさい。議論が的を射ているかどうかわからないんですけど、常にそこが気になっているので。社会的に枠組みが余りにも固定化されちゃっていて、こういう議論をするときに、子供たちがどうやって好奇心を育てるんだらうというのが、それを奪うというか諦めることばかり教えちゃっているような気がしていて、そこを変えたいという思いがありました。

(宮平委員長)

なるほど。喜屋武委員が喜んでいらっしゃるの。多分、発言したがついていると思いますので、よろしくをお願いします。

(喜屋武委員)

はい、ありがとうございます。この会議の中でよく理系文系の話が出ているんですけど、今、国も理系文系という考え方をもうやめようという動きになっているんですね。ちょうど今、私、経済産業省の「未来の教室」のSTEAMライブラリーという事業に関わっています。これは、要するに理系文系という考え方ではなくて、価値創造を高めるために総合値とか、分野横断的な学びというものをやっというふうなことで始めている取組なんですけれど、詳しいことは内閣府の「総合科学技術・イノベーション会議」というところの報告書が出ていますので、そこにも少し関わっているんで、ちょっとそのお話をさせていただくんですけど、結局、子供たちの興味を高めるためには、教科だけで分けたりとかするのではなくて、国語がわかったり経済がわかったり芸術がわかったりする中で、自分でイノベーションしていくとか、自分で作っていく探求の学びをしていこうというふうな流れが始まっているので、今回の万国津梁会議の報告書もそうなんですけれど、そういう、子供時代から大人になっても探求していく力とか、それを活用していく力とか、それをマネジメントしていく力をつけていくためにはどうしたらいいかというベースでお話をしていたつもりだったんですけど。

最初の話に戻ってしまうんですけど、これをサマリーにすると、その思いがまた横断していなくて分断されているのをどういうふうにしたらいいのかなと、この数ヶ月皆さんとわくわくして話していることが形になった時に、そのわくわくが消えているので、何とか工夫した書き方ができるといいなというふうに、とても感じながらお話をしています。なので、ぜひゴールは何なのかというところをもう少し、今回幸福というところはあるんですけど、もうちょっと具体的に沖縄県民が何を持ったら幸福になるんだらうとかというところが、少しふわっとした書き方になっているかなと思っています。時代の流れとかいろんなものがすごく動いているんですけど、この形にした時には、ちょっと言葉が乱暴で申し訳ないんですけど、少し古い感じの言い回しになっていたりするところもあるので、こちら辺をもう少し工夫できたらいいなと、サマリーとかを見ていて感じているところです。

(宮平委員長)

すみません。大体、学者というのは分析する。分析って分断なんですよね。癖なのかなというのがあるって、上江洲さんからいただいた時に、2の方に幸福度であるとかいろんなものを設けさせていただいたんですけど、要するに、生涯を通じて自分らしく生きるということだと思ってしまうんですけどね。そのためには何が必要かという、やはり興味関心を持ち続ける心がとても重要なかなと思ってしまうんですけど、これが失われてしまったら、いくら外からおいしいもの食べさせようと思っても、食いつきが悪いんじゃないのかなと。興味関心を常に持たせるためにはどうすればいいのかとか、或いは大人になって、小中学校になったときに失いかけている、今山崎委員がおっしゃっていたように失いかけている心を揺り動かすにはどうすればいいのかと、非常に難しい目標です。でも、やれないことはないと思うんですけどね。

(喜屋武委員)

そうだと思います。それが多分、プラットフォームとかでの議論が必要だし、今、実際私が直接コーディネートさせていただいている宜野湾市さんとか久米島町とか伊江村、多良間村、北中城村さんとかも、やっぱり中小企業家同友会の方だったり、社協の方だったり、PTAの方だったり。宜野湾市だと冲国大の仲座先生とか、皆さん来て、宜野湾市に必要な人材像は何ということ様々な角度から話していますし、そこに小学校、中学校、高校の先生がいらっしゃるんですよ。その中で、先程、山崎委員がお話されていた学校間の交流というのは、実際には難しいんですけど、例えば宜野座村だったら、小学校でミシンの使い方を一人一人先生が教えるのは大変だけれど、高校の家庭科クラブの子供たちが午後から入ってきて小学生一人一人をサポートしようと、そこで話が盛り上がってくるんですよ。こういうのを沖縄県は今、市町村でやっているの、こういうのをもっと県としてやるんだよというプラットフォームづくりだと私は認識しているので、その小さな種はいっぱい植えられているし、沖縄のゆいまーる精神とか、タックワーサー文化というのはあるので、ここがうまくペーパーに綺麗に落とし込められたらいいなと思うし、平田委員がお話された「じんぶん」の話とかというちょっとキャッチーなキーワードとかも、ポコポコ入れていくと沖縄らしいし、もしかしたら海士町に負けていない宝物が沖縄にはたくさんあるんじゃないかなというふうには感じます。

(宮平委員長)

そうですね。先程の、今回のプラットフォームは「じんぶん」という言葉をあまり使っていないです、出ていないです。

(喜屋武委員)

そうなんです。あの時に話していたキャッチーとかわくわくするのが削ぎ落とされちゃった感じになっちゃって、ちょっと寂しい感じです。

(宮平委員長)

そうそう。「ちむどんどん」とかという言葉を使っていたんですけどね、平田委員。どこに行ったんだろうかと。もう1回、2ページ目を見せてもらえますか。ここですね。特に行政に求められているものとして、この前、平田委員がお話していた中には、プログラムとしては「ちむどんどん」であるとか、おっしゃってましたよね。議事録を見ないと、ちょっと私も忘れてしまっているのですが。

(平田委員)

そうそう、そうでした。「じんぶん」とか「りっかりっか」とか「ちむどんどん」とかだ

ったような。要するにあれは、基本があって応用があつてみたい。先程来、出ている中期・長期とかとちょっと似ているんですけど、基本があって、それが総合学習的なものであったとするならば、今度は専門的な学びに行くというところで、それが実践とか応用みたい。基礎を学んで、実践をして、応用という大体三つのパターンですよ。だから、それを確か「じんぶん」とか、実践なので「りっか」とか「ちむどんどん」と言ったような気がしますね。

(宮平委員長)

例えば、平田委員、委員の皆さんにもお聞きしたいんですけど、この右側の「社会人に必要な能力」として、「全ての人に求められる能力」を「じんぶん」と言ったらどうですか。

(平田委員)

そうですね。すごく面白いと思うんですけど。いわゆるコードネームというんですかね。よく通称というか、みんなで略して言うじゃないですか。例えば、「阿麻和利」だと「きむたか」とかと言いますし。そういうキーワードがやっぱり重要ですよ。先程、喜屋武委員がおっしゃったように。

(宮平委員長)

やっぱり「じんぶん」のことを言っていますよね。

(平田委員)

「全ての人に求められる能力」が「じんぶん」なのかな。「立場や業種によって求められる能力」というのが、何でしょうね。

(宮平委員長)

「りっかりっか」じゃないですか。

(平田委員)

そうですね。そういう部分になるんですかね。

(宮平委員長)

具体的なものは何かというと、やっぱり次は「きむたか」になるのか、そんな感じがしますが、この辺、上地委員どうですか。要するに、活用できる能力が「じんぶん力」、上の方が「りっかりっか」なのかなという感じがするんですけども、上地委員どうでしょうか。

(上地委員)

すみません。私自身も、今、平田委員の発言がとてもいいなというふうに思っています。実際に地域で特産品の開発とか、いろいろとお話させていただくときに、私も「じんぶん」という言葉や「ちむどんどん」という言葉はずっと何十年も使ってきているんですね。やっぱり地域の「じんぶん」を活用しないと、地域の資源を本当に価値あるものに変えていけないということが実際にあるものですから、いわゆる地域資源を活用して産業化していく場合にはどうしても、そこで培われてきた伝統的な「じんぶん」というのが一番必要なんですよね。そういう意味では、まさに「じんぶん」という言葉を使うということは、この事業の場合、必要なのかなというふうに思います。

(宮平委員長)

そうすると沖縄らしさも醸成されますし、いいのかなと思ったりしますね。他の先生方、いかがですか。平良副委員長、いかがですか。

(平良副委員長)

先程から理系文系のお話が出ていますので、ちょっとここにコメントさせていただくと、このキーワードは私がちょっとこだわっていたところがあったので、事務局の方が反映してくださったのかなと思っているんですけども。先程から委員の皆様のご意見をお伺いしていて、確かに今は理系も文系もないというところ、昨年度から議論しておりますので承知している一方で、すごく企業側の、特に沖縄県のプロパーの人間が、ある意味、本土の大企業の中で何十年とサラリーマンとして仕事に従事していく中で、地域の人間がその企業の中でヘッドをとっていき、いわゆる社長になる、役員になる、重要な職種を担っていくということを、産業人材の最終形とは言わないかもしれませんが、一つの成功事例として考えたときに、どうしてもある一定レベルの役職水準以上になると学力というところが求められてきます。その中で理系というふうに、あえて私が発言させていただいた背景というのは、沖縄県はその中でも、例えば自然科学であったり、先程から出ているIT人材の育成であったり、当然医療だとか薬学部、そういったところの分野に非常にビジネスチャンスがある島なんじゃないかと思っています。けれども、こういった学ぶ機会が県内では少ないのではないかと、今、非常に感じているところがありました。優秀な中学生、高校生は大学選択時に県外に行ってしまう。そのまま県外の企業で就職して沖縄になかなか帰ってこない。やっぱりこういったところは沖縄県の企業人材をさらに拡大していくために、ちょっともったいないなというふうにすごく感じているところでした。

なので、皆さんがおっしゃっているとわかっていて、あえて、こういった理工系の主な学部で活躍でき、かつその専門の人材、沖縄県の産業界の発展に資する若者が育成できるのであれば、もう少し裾野を広げたそういった学部、もしくは学科、先程、学部じゃなくてもいい

いいんじゃないか、科目の新設でいいんじゃないかというご意見もあったと思うんですけども、そういったことを学べる敷居の低い、どこでもこういった技術・知識が学べる、或いは学んだものがちゃんと卒業資格として認定される、そういった機会があってもいいんじゃないかと。もしかすると県内の学部新設じゃなくて、インターネット等で他県、或いは海外の学校で、オンラインでの資格取得ということができる環境が、今よりもあった方がいいのではないかと、今でも思っております。なので、理系というふうに言ってしまうと、ちょっと誤解を生じさせてしまうんですけども、どちらかという、やっぱり理工学部系に重きを置いた分野での人材育成は力を入れてもいいんじゃないかなというふうに思っていたところです。ちょっとこの部分は私の方からコメントさせていただきます。

(宮平委員長)

理系系とかというのは汎用技術、応用技術が可能なレベルの分野なんですね。だから、この辺が非常に我々、科学をやっている人間からすると、理系文系と言われると、ちょっと違和感を感じる場所なんですよ。科学は先程言っていましたように、システムがあってそのシステムを観察することによってデータが出て、そのデータを加工して、その加工したデータが再現性が可能かどうかということで、我々は理系文系とか、或いは社会科学系というようなことを分けているものですから、今のお話を聞いていると、再現性の高い分野のお話をなさっているところがありますね。そこをどうするかが問題ですね。そうした場合に、なぜ沖縄で工業系が発展しないかという、非常に面積が狭いものですから工業技術を生かしたもののというのは難しいんですね。IT系に関してはケーブルを経て繋がればできる可能性があるんじゃないかということでICT技術を県の方も積極的に導入しているという背景があって、その辺りをどうするのかというのはまだまだ答えが出ていないようなところがあったりします。山崎委員いかがですか。

(山崎委員)

まさに高等教育機関の役割はそこかなと思っているので、特にこれから、本当にITリテラシーとかその辺が一般化してくるので、テクノロジーが伸びれば伸びるほど、その専門分野にもすごく秀でた方、これは別に情報系だけに限らない、バイオもそうだし、金融もあるし、いろいろ分野があるんですけど、磨いていくのは高等機関、大学も含めた、非常に特殊な価値だと思っています。

(宮平委員長)

それで今は情報のやりとりであるとか、そういった組織化というのは国境を越えて、あちらこちらでできるようになっているので、そういった意味では沖縄の可能性というのはあるというようなことは前から言われているところですよ。



(山崎委員)

そうですね。だから、今せっかくそういうふうにもどこでも情報が取れるので、興味を持った人が取りに行ける状況ができていますので、学校の中の枠に押さえ込まない方が、人の可能性は伸びやすいと思うんですよね。県外の大学でも講義ができたりとか。

(宮平委員長)

そうですね。インターネットの開示がまさにその通りで、データはあるよと。それを利活用するのは、これからは皆さん方の興味関心度と能力に関わってきますよというのが、最初、インターネットが開放となった時の話になっていましたね。小島さんいかがですか。今の、この辺り、高等教育に必要な取組について。

(小島委員)

私自身は理系出身なんですけれど、役所に入って技官として採用されたのですが、法律も当然知らないといけないということで、技術力というよりは、というような経験もしたので、分ける必要性はそんなに感じていないところがあります。また、現状、大学で共通教育を担当しているんですけれども、共通教育の科目は理系も文系も、いろいろな学部関係なく受講できるんですね。なので、一緒に勉強するという意味においては、あえて分ける必要はないのかなとは思いますが、一方で、得意不得意はやっぱりあるのかなというのは、授業をやっていて感じることもあります。理系的な考え方ができるなというのは、理系の人間からちょっと色眼鏡で見ているところもあるのかもしれないんですけれど、やはり、少し理科を学んでいると数字とかに対する抵抗力が少ないとか、そういうところは正直あるので、その辺りをどう今後捉えていくのかというところは、ちょっとまとまっていないのですが。私自身の経験から言うと、そんなに差はなくていいのかなと思うんですけれど、現状は大学に入ってくるまでの段階において、多少の差があって、そういうところを一緒に学ぶことで補っていけるような環境になっているのかなと思っています。

(宮平委員長)

ここは、まず、「サイエンスリテラシー」であるとか、或いは尖った能力を伸ばしていくとか、そんなイメージなのかなというふうに思います。「サイエンスリテラシー」。高等教育ですね。

(小島委員)

数字に対するアレルギーとか、そういうのはあるのかなと思いますね。

(宮平委員長)

そうですね、ありますね。特にこれは、文系理系に限らず、実は学習障害を抱えているお

子さんがいると、どちらか一方には出てくる可能性があるんですね。数字に対してできない、或いは図形に対してできないとか、いろんな悩みを抱えているのが40人に1人ぐらいいるということですので、一概にやってしまっただけはまたちょっと危険性があるということ。ですから、ここはまず、いろんな能力を伸ばしていくという意味に広く捉えたらどうかなということですね。「サイエンスリテラシー」とか、そういったことかなと思いますね。

あともう一つは、小島委員からもお話があったんですけど、20年前にアメリカの30ぐらいの大学を訪問し、アメリカの大学教育を伺うプログラムに参加しました。その時に言われたのが、「何で日本は理系文系と分けているんだ」と。「そうすると、いろいろ発想が狭まってしまって新しいものを生み出せないですよ」と。アメリカが失敗したことを何で日本はやっているんだというようなことを言われたことがあって、それ以来、あまり理系文系とこだわらないほうがいいんじゃないかなというようなことを、あちこちで唱えているんですけども。

それともう一つは、すぐに役立つ学問を出しなさいとかという、あれも、すぐに役立つ学問はすぐに役立つ学問でなくなる学問になってしまいますのでね。そういった意味では興味関心を高めていって研究し続ける、そして学び続ける力ということをやらないといけないというふうなのが、私の考え方なんですけれど。

すみません、ちょっと持論を言ってしまったんですけども。こんなところなのかなと思いますけれど、そうすると先程、最初に山崎委員がおっしゃっているように興味関心を持たせ続ける、生かし続ける、そういった落とし込みが重要かなと思います。今、大学でも自由選択科目みたいなものがあるので、例えば、高校でも自由選択科目を作って、それは専門高校で学んだものを読みかえるとか、或いはどこか他のところで学んだ、ボランティアで学んだものを読みかえるとか、そういったこともあってもいいのかなと思いますね。そういった柔軟な発想をやることによって興味関心を持ったところが深められるのかなというような、ジャストアイデアですけども、そういうようなことがあったりします。では有木委員、どうぞ。手が挙がっていらっしゃいますので、よろしくをお願いします。

(有木委員)

私もちょっと整理できないままお話してしまうんですけど、平良副委員長のお話を聞いて、なぜここに理工という言葉が出ていたのかがよく理解できました。私も世の中の的にはいわゆる大手と言われる企業におりまして、私、出身が実は広島県福山市鞆の浦という『崖の上のポニョ』の舞台になった、ものすごく田舎で育っているんですけど、今お話を聞いて思ったのは、理系なのか文系なのかとかというお話しというよりは、やっぱり必要なのは最初の方にキーワードが出ていた「稼ぐ力」というところなのかなというふうに思っています。沖縄は本当に人のためにとか地域のためにとか、すごく思いが強い一方で、稼ぐとか競争するとかというようなところに対するマインドというのは、さほど強くないかもしれないなというふうに感じている中で、社会貢献もすごく大事ですけど、どうやって稼ぐ

に行くんだと。技術があっても、仮に企画力があっても、それがどう経済活動に繋がっていくかみたいな、そういう考え方をどう鍛えていくかということがすごく大事なのかなというのを、今お話を聞いていて感じました。答えは私もないんですけど。

(平良副委員長)

ありがとうございます。本当にすごくハートは良くて、人当たりも良くコミュニケーションも良くて、皆をまとめていく力はすごくあるけれども、そもそもそこでビジネスを組み立てていく、思考を鍛える、論理的に他者に話す、説明をしていく、理系脳と言ってしまおうとそれこそ古臭くなってしまいうんですけども、物事を体系的に捉える力や、垂直思考というのは、その学部を卒業している方がやっぱり強いというのが一つあると考えます。理系文系と分けたいと言っているわけではなくて、そういった学問分野を専門的に学べる機会を多く広く門戸を開くというのは、ある意味、そういう成長の機会に繋がるのかなと、そういう意味での発言でした。ありがとうございました。

(宮平委員長)

そうしますと、先程の図を出してもらいたいのですが、ここでおっしゃりたいのは、要は、社会を体系化し、ビジネス等に組織化できる力ということですかね。なぜ体系化が理系の方が上手いかというと、そもそも理系の発想は何かというと、自然の中にはシステムがあってシステムを観察すると、それがデータとなってデータを組み立てていくと理論化ができるという、そういった教育方法が取られているんですね。ですから必然的というか教育の流れからすると世の中をシステム的に考えようとする流れが出て来るのかなと。それを観察してデータ化していった数理モデルとかに持っていく。そうすると世の中を体系化していった、数理モデルですから因果関係なんかで持っていきますから、ここを解決するといいいんだよというような発想が出てくるので、今、平良副委員長がおっしゃったようなことができるようになってくるのかなと思うんですけども。そんな意味合いでしょうか、平良副委員長。

(平良副委員長)

はい、そうですね。宮平委員長がおっしゃったように、課題をそもそも体系的に捉えて、解決策を論理的に構築することができるというふうにも言い換えられるはずですので、今の宮平委員長のご説明で良いかと思います。

(宮平委員長)

それをどういうふうに言うかについては、小島委員、どういうふうにまとめるとよろしいでしょうかね。

(小島委員)

すみません。ちょっと思いつかなくて、気の利いた発言ができないです。

(宮平委員長)

ありがとうございます。ちょっと皆さんで考えて。山崎委員。

(山崎委員)

二つあるかなと思ひまして。「稼ぐ力」とか体系的に考えるというところも、一つ非認知能力の訓練かなと思っているんです。やっぱり若いうちから課題に向き合って探求的なことをやっていけば自然にロジカルシンキングみたいなところが身についていくんですね。だから、そのスキルがない中、突然社会に出ても難しいかなと思っています。

もう一つの側面で理工系は、さっき小島委員がおっしゃったように、すごく特性のある子は小学校、中学校からピカピカ目立ってくるはずなので、そういう子を社会として普通高校で普通にしてしまうのではなくて、特別に光らせていくというのも多分必要なんだろうなと思っています。

ビジネスで、僕がレキサスという沖縄のIT企業にいたときに感じたのは、一般的に文系理系で分けたくはないんですけど、一応わかりやすくするために分けると、文系のビジネススキルは、すごく仕事ができると言われる人も2倍か3倍ぐらいの成果しか出せないんですけど、理工系に関しては、同じ人間でも100倍の成果が出せるんですよ。時間にしても、美しさにしても、何かにしても。理工系の秀でた人というのは、ものすごい未来価値があると思っているので、そこを社会として引き上げつつ、でもさっき言った文系理系とかという分け方ではなく、ハイブリッドと僕たちは言っているんですけど、当たり前のようにロジカルシンキングができ、体系化して、ものが話せるような訓練は、それこそ本当に思考と言動の癖付けを10代のうちからやっておくことが僕は必要だと思っています。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。新崎委員いかがですか。

(新崎委員)

私、文系なので大変発言しづらいんですけども、今のお話の中で基礎的な部分を小中の方で、社会に出るための研鑽、稼ぐ力だったり、理工的な考え方や取組方というところは高校の時に研究できる、研鑽できる機会として捉えて、その研究や研鑽が基礎としての小中の基礎学力だったり、様々なリテラシー的なものだったり。

さらに社会人の一歩手前でありますので、もしくは大学に向けて、そういった研究をするにあたって、いろんな研究や研鑽できる機会ということで、高校の時にそれを目的として取り組む体験ができたらいいなというところがあって。先程、山崎委員からもあった高校同士

だったり、もしくは進学も含めて企業研究だったり。就職活動としての企業研究ではなくて、そういった業種に就きたいとか、その業種の中でどんな能力が必要なのだろうかとか、そういったものを高校の時分に体験できたり、もしくは関係機関の方がそういった場を提供してあげることができれば、さらに伸ばす力というところの必要性を主体的に取り組んでいただけるのかなと思いました。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。喜屋武委員いかがですか。

(喜屋武委員)

はい。これは質問なんですけれど、ちょっと的が外れているかもしれないんですけど、この幸福度向上と不幸度低減の辺りのところに、先程、平良副委員長のお話を聞いて、あつと思っただけなんですけれど、例えば沖縄らしい、どこにも負けない産業があると、それが稼ぐ力になったり、貧困の問題も解決できるし、教育にかけられるお金も成るので、何かそういうもうちょっとわかりやすいことを書くと、この提言書はぶれちゃいますか。

(宮平委員長)

いえ、大丈夫ですよ。何を言いたいかと言うと、要するに世のため社会のためにやるためには稼がないといけないわけですよ。プラス、稼ぎながら自分だけでいいのかというと、そうじゃないわけですね、やっぱり皆が良くなっていかないと。そして、取り残される人がいると、その社会は埋没していくことになるわけですね。そういった意味で、バランスをとりながらやっていかないといけないということの意味しているわけですね。

(喜屋武委員)

なるほど。わかりました。ではそこに、例えば沖縄らしい言葉をちりばめた方がいいんじゃないですかと、先程ちょっとお伝えしたんですけど、そういうふうにもう少し沖縄県民が、どこにも負けないような産業を発展させるには、理科系のこういうスキルも必要だし、文系のそういうスキルも必要なので、こういうことが例えばここにポンッとゴールで打ち出せると、「だからここにこういうのが高等教育で必要なんだね」というふうにわかりやすいかなと思ったので、意見です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。上地委員いかがですか。

(上地委員)

私も文系なんですけれど。実際にいろんな企業の方と様々なビジネス展開のお話をさせ

ていただく中で、例えば東大の大学院の人たちがベンチャーで立ち上げてリバネスという会社が、ユーグレナというミドリムシを八重山で産業化しているんです。ただ彼らだけではどうしても駄目で、地元出身の若い人たちと一緒に取組んで、今一部上場企業になってきているんですけれども、国内の大手のいろんな商社ともビジネスとして連携しながらどんどん上げていって、八重山で作ったミドリムシが今ジェット燃料にもなっているんです。リバネスの場合、東大の農学部のご出身の方がほとんどだったんですけれども、農学部というのは確かに理系だとは思いますが、ものすごく文系に近い学部なのかなとも思うんですね。要は、非常に地元密着型ですし、結構、文系の皆さんが入り込むことによって、ビジネスが成功しているということもあります。

私自身もずっと、たくさんの方の企業を相手にしてきましたけれども、必ずしも理系の管理職の人が優秀な経営者とは限らないというのが実感ではあります。実際に結構大手のIT企業の沖縄事業所の場合は、どうしてもITの知識やスキルよりも、むしろ人とのコミュニケーション能力であるとか、そういうことの長けた人が管理職として成功している、会社自体も成功しているし、社員も一人もパートやアルバイトなしで、何十人と全員正社員で、しかも何十年も続いている会社というのを作り上げてきているところは確かにあります。

だから、先程、山崎委員がハイブリッドとおっしゃっていたのですが、まさにハイブリッドの発想でやっていかないと、産業界、経済界の中でも成功はしていないのかなと。一つの企業の中で昇進していく、昇っていくのは、確かにさっき皆さんがお話している通りかもしれないけれども、組織全体を束ねる、そして組織を生かしていける人たちも実際に必要なわけで、それは必ずしも理系に偏らないのかなと。そういう意味では、さっきの山崎委員がおっしゃるハイブリッドという考え方が、現実の沖縄で私がつき合っている多くの企業さんの場合は多いのかなというのが実感です。答えにはならないかもしれないんですけれども、そういう意味では、分けることがどうなのかなという疑問は、まだ私の中ではあります。以上です。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございました。鯨本委員いらっしゃいますか。

(鯨本委員)

はい、おります。

(宮平委員長)

ではこちら、「高等教育機関で必要な取組」の中で、理工系人材の高度化、理工系に限らないほうがいいのか限った方がいいのかということで議論しているんですけれども、鯨本委員の考えを教えてください。

(鯨本委員)

私も完全な文系の人間なので、聞きながらいろいろと思うところがありましたけれども、実際は分けて考えないというか。例えば私も小さな事業を起業してここまでやってきてはいるんですけども、そういったところで、理系か文系かというところはあまり関係なく、目の前にある課題ですとか社会の課題に対してどのように解決していくか。その時々、小さな組織であれば当然のごとく、いろいろな人と協業していかなければいけませんので、そういったところでいうと、この会議体での社会人に必要な能力と能力向上に向けたところで、全体的な話をするとう系か理系かみたいなのところに関する分類は不要だと思っています。あるとすれば左上の「立場や業種によって求められる能力」に関しては、業種とか特殊な能力によっては、もちろん理系の方が優れているものもあると思います。ですから、全体に関しては、分けずに考えていかれるのがいいんじゃないかなと思います。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。平田委員いかがですか。

(平田委員)

ちょっとだけ僕も思った部分があって、文化の仕事の観点からいくと、例えば集客とかマネジメントの分野もすごく重要ですよ。もともとクリエイティブな文化の人だけじゃなくて、いわゆる理数系的な考えができる人、そういうロジックを持った人というの必要ですし、例えばチームビルディングとか組織を作って運営する上では、以前もお話したかもしれませんが、いわゆる体育会系的な、今、理数系と文系だけになっていますけれど、体育会系的な組織力、それも、例えばチームプレイが得意な野球とかサッカーとかというスポーツをやっていた人と、一方で空手とか、いわゆる一人でやっていたような競技の人というのでは、実は筋肉が全然違うんですよ。それは、やっぱり心の筋肉も筋力トレーニングと一緒に、いろんなそういう分野に長けた人たちというのが、一つの業種、職種にも関わって稼ぐ力に繋がっていると思うんです。

今、文化の立ち位置で言うと、沖縄も文化的な部分でのコンテンツはすごくあると思うけれども、プロモーションとか、或いは集客が弱いとか、常に補助金、助成金に頼らないといけないようなシステムというのが、沖縄の場合、文化の弱い面があるので、文化の産業化みたいなことを考えるときには、そういう面でいうと、今の議論でいくと理数系的な人材の要素も必要ですし、もちろん文章が書けるような、そういう文系的な要素ももちろんですが。だから、きっとあらゆる分野に通じるものなのかなという印象を受けて聞いていました。答えにならないんですけども、ちょっとそんなことを思っています。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございました。有木委員お願いします。

(有木委員)

私は高校生まで理系で大学から文系なんですけれども。先程、平良副委員長がおっしゃっていた何らかの一例として、例えば大手企業の上層部に行くために、みたいなお話をされていたと思うんですけれど、例えば弊社の中で活躍して上位に行くためのところの能力で、「見立てる」、「仕立てる」、「動かす」という、この三つの要素が必要であるというふうに言われているんですけれど、いわゆる「見立てる」、「仕立てる」は割と理系脳が必要で、これは小さな組織だと、動かす力で何とかパワーマネジメントでいけるんですけれど、構造的に物事を捉え、課題を特定し、ちゃんと仕組みを作って組織を動かしていくというところはやっぱり理系の能力がある程度必要なんだろうなというふうに思ったときに、例えばうちとかで言うと、営業組織であつてもちょっと理工的な能力がないと、なかなか大きな組織は動かしていけないというようなことは、私も身を持って感じていますので、文字に起こしてしまうと技術職的な捉え方に見えてしまうんですけれど、皆さんの意見を聞いていて、私はこの議論をしている最初よりも、この理工の重要性が強まりましたというのが、今思っているところです。ただ、分ける必要はないとは思っています。

(宮平委員長)

やはり社会課題とか様々な課題を構造化し、そこでそれに対する因果関係とかを見出して、それを組織化できるという人材のことになっていますね。あと先程、小島委員がおっしゃっていましたように、理系だろうと文系だろうと、世の中に出ると求められる知識とかは高校や大学で学んだ教育内容やスキルだけでは足りません。駄目というか、足りないですよ。高校や大学を卒業後が、様々なものを学ばないといけないということです。その時にプラス、興味関心を持って行って学んでいける心の余裕、或いはこれからもっと学んでいくんだというような知的好奇心であるとか、そういったものがないと、今言ったように、会社や組織の上層部の方とかにはなれないんじゃないのかなというふうに思うんです。おっしゃっているように、社会課題を構造化し、そしてシステム化するという意味では理工的な発想が必要ですし、それを先程「りっかりっか」とか「じんぶん」とかという言葉で、皆がわかるような言葉で落とし込むためには、文学的な要素とか歴史的な要素とか、そういったものも必要になってきます。そして、先程、小島委員がおっしゃったように、必要な知識はどんどん吸収して行って、自分のものにして行って、それを還元していけるような、そういったことがこれから高等機関に求められるのかなというふうに、お聞きして感じました。金城委員、どうですか。

(金城委員)

私は、高校に入った時からずっと理系のクラスにいたので、逆に皆さんの話を聞きながら、じゃあ文系が理系と違うのであればどういう授業をやっているんだろうと思って聞いてい



たんですけれど。

皆さんの話を聞いていると、やっぱり理系だけに求められない能力なのかなと思って  
いる能力については、今、低学年から導入され始めている探求の授業とかに該当するんじ  
ゃないかなと思って聞いていたんですけれど。そういう中で培っていけばいい能力で、あ  
えて理系的思考を身につけましようと言った方がいいのかどうかはちょっと置いておいて、  
どちらにしろ、別に高等教育機関になってから必要とされる能力じゃないと思いますので、  
最初の方でキーワードで出てきていた進化させていく能力だと思うので、小学校、中学校の  
時からそういう理論的な考え方ができるようなことを探求の授業の時間でやるとか、そう  
いうふうに明確にして教育していけばいいんじゃないかなと思って、皆さんの話を聞かせて  
いただいていた。以上です。

(宮平委員長)

そうすると、やっぱりこの探究心というのが今、システムサイエンスの中では、先程言っ  
ているように、世の中はよく観察していくとシステムがあって、それをデータ化していくと  
いうのがシステムサイエンスの中に入っているんですね。ただもう一つ重要なポイントは、  
「よく観察するって何だ」というところになってくるんですね。そうすると、実は抽象化す  
る能力が必要になってくるんですね。ちょっと高めていって抽象化していく。だからここ  
は理系脳とか文系脳とかと言っているんですけれど、金城委員がおっしゃっているように、  
両方の力が必要なのかなというふうに思いますね。そして必要に応じて、どんどん学んでい  
く、この探求心でしょうね。探究心と研究心と、あと知識欲、こういったのがあると思いま  
す。おそらく世の中、社会的に或いは経営的にそういった立場に立たれている人は、どんど  
ん、大学を卒業してからいろんな知識を学んでいかれたんじゃないかなというふうに思う  
んですね。鯨本委員だって、多分、経営の分野を勉強して、次はいろんな離島に足りないI  
CTとか、そういったものも勉強なさったでしょうし。小島委員も先程おっしゃっていたよ  
うに、官僚になられると最初に学ぶのはやっぱり法律関係の体系です。高校や大学を卒業後、  
仕事に応じて必要な知識やスキルが求められています。喜屋武委員も、データサイエンスで  
統計学を勉強してみたりしていますからね。だから、そういったことじゃないかなと思うん  
ですが、平良副委員長いかがですか。

(平良副委員長)

皆さん、ありがとうございます。この話題でこんなに時間を割いていただいて、皆さんの  
ご意見をいただきまして、本当に私自身も勉強になります。ハイブリッドで教育していく必  
要があるということは皆さんの意見を聞きながら、本当にそうだなというふうに思いなが  
ら聞いております。

沖縄県の人材に今、ちょっとこの部分を強化した方がいいんじゃないかなと思ったとこ  
ろでのコメントではあったんですけれども、多くの意見を聞いて全体的に具体的な取組内

容として皆さんに必要な能力と、立場や業種によって必要とされる能力と分けて整理ができそうだなというふうに聞きながら感じましたので、今までの議論に賛成しております。ありがとうございました。

(宮平委員長)

そうすると、先程、山崎委員がおっしゃったような、まずは高等教育で興味関心を失わせないような教育、育む教育、そして尖った知識をさらに高めるような能力、ハイブリッドな教育のバランスですかね、これから求められるのは。山崎委員どうでしょう。

(山崎委員)

誤解のないように、皆さんの話を聞いていて修正したくなっただけなんですけれど、さっき文系が2、3倍、理系は100倍という話をしましたけれど、これは文系対理系を表現したんじゃない。僕、バリバリ文系です。文系のスキルをどんなに磨いても、アウトプットは2、3倍ぐらいの差しか出ないということです。理系対理系は、同じ理系でも、例えば圧倒的な差が出るということを言いたかっただけなんです。だから、文系対理系という話ではないですということをお伝えしておきます。

僕の結論としては、ハイブリッド化なので、あまり分離という言葉を使わない方がいいかなと思っていて、例えば皆さんがよく知っているGoogleなんかは、日本で言うと理系の会社みたいな扱いになっちゃうんですけど、あそこは文系が5割いるんですよ。エンジニアは半分しかいないんですよ。でも日本という文系と言われる営業とか、いろんなことをやっている人たち、マネジメントをやっている人たちがITのことを知らないかということ、ITエンジニアと話せるだけのベースの知識を持っているというだけの話で、多分いろんなデザインからプレゼンテーションからマネジメントから、みんな、できるんですよ。それはエンジニア側の人でもできるんですよ。でも、自分はエンジニアが強い、マネジメントが強い、デザインが強い。全般的に知っている上で、ここだけがすごいプロフェッショナルなんですというところが、多分、今、世界的なスキルの潮流かと思っているので、ハイブリッドの中で私はデザインが好きとかマネジメントが好きとか、とことんエンジニアリングが好きみたいな、そういう育成の仕方が僕はいんじゃないかなという個人的な意見でした。

(宮平委員長)

有木委員の方から出ているような、共通の学力というものをベースにして、個人が持っている特定のものを、どんどん磨いていって、そしてチームワークでやっていけるようなイメージですね。

(有木委員)

山崎委員の話に、私、激しく共感します。うちの社内も一緒だなと思いながら聞いており

ました。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。小島委員いかがですか。理系の小島委員から見て、これまでの展開をまとめていただきたいのですが。

(小島委員)

いや、まとめるのはちょっと。私もちょっとストーンと落ちたような気がして、皆さんの話を聞いていました。先程、委員長がまとめていただいたように、興味を持って学んでいく、そういう好奇心、知識を増やしていこうという、そういう能力がベースにあれば、文系からだろうが、理系的なところを学ぼうという意欲にもなるでしょうし、逆もまた然りかなと思いますので、そういうところが基本的なニーズというか、求められるところなんじゃないでしょうか。そういうふう聞いていて思いました。

(宮平委員長)

わかりました。そうするとやっぱり教育機関で必要な取組としては、まず興味関心を失わせない。

(小島委員)

そうですね。そうですね、学び方を教える。学び方というところも重要なのかなと思います。一生学びだと思っていますので。

(宮平委員長)

そうですね。この辺りを失わせない、そして一生の学び、これから一生学ぶんだよということですね。そして、私、ゼミ生に言っているんですけども、ゼロからでもできるような、薄いようなものからやっていかないといけないわけですね。「興味関心を失わせない」ですね。

もう時間はあと 50 分ほどですね。あとはこの分野の中で、特に何か気になるようなところがございましたら、お願いいたします。よろしいでしょうか。またちょっと後で振り返っていきたいと思います。

次は 5 ページ目に行きましょうか。この中で、「グローバルシンキング」というのが、「情報を収集し、分析する力」。「グローバルシンキング」というのは、これはちょっと私、耳慣れない言葉なので、どなたがおっしゃったのか、ちょっと教えていただきたいのですけれども。これは、上江洲さん、どなたが。

(事務局・上江洲)

すみません、ちょっと今、手元に資料がないんですけれど、山崎委員からのコメントであったかなと記憶しています。

(山崎委員)

僕ですかね。非認知能力をご紹介した時の資料に入れてはありますけれど。「地域や国レベルではなく全世界的な視点で考動できる力」ということですよね。

(宮平委員長)

ちょっとここだけ異質な感じがするので、もう1回、画面を共有してもらえますか。「情報を収集し、分析する力」、「必要な情報を偏りなく収集する力」、「分析・行動に必要な情報を収集する力」。山崎委員、ここで、これでいいのかなという何か。

(山崎委員)

「グローバルシンキング」は、「論理的思考力」とは少しニュアンスが違うんですけれどね、そこは。

(宮平委員長)

グローバルシンキング力というのは、単体ではできますよね。要するに世界的に視野を広げなさいということで。

(山崎委員)

沖縄という目線じゃなくて、1回広げて、世界単位で考えるという、鳥の目・虫の目みたいなことですが。

(宮平委員長)

「グローバルシンキング」は俯瞰的な見方と言う意味ですね。

(山崎委員)

鳥の目、虫の目は議事録に書かなくていいです(笑)

(宮平委員長)

書かなくていいと思いますよ、これは。グローバルシンキング単体だと、今、山崎委員がおっしゃっているように、世界で起こっていることを幅広くどんどん学びましょうというようなことですね。

あとは、「手持ちの情報からアイデアを具体化する力」、これもちょっと違いますね。「構想力」は、これは有木委員にお聞きしたほうがいいかな。「構想力」というのは、手持ちの

情報からアイデアを具体化することになりますか。ちょっと違うようなイメージを、私、持っているんですけども。

(有木委員)

私ですかね。これ、私が言ったことが言葉になっていますか。

(宮平委員長)

いや、多分そうじゃないと思うんですけど、何かちょっと。

(有木委員)

「構想力」というのが、今見ていると要らない気がしました。ただ、アイデアを具現化する力というのは、上に書いてあるので。

(宮平委員長)

書いてあるんですよね。だからアイデアを生み出す力、具体化する力、実現する力で、じゃあアイデアはどうやって生み出すんだというふうなことかな。

(有木委員)

そうですね。ただ具現化って、実現するという形で言うと、例えばステークホルダーと交渉して、聞く力とか、どこまでここで掘り下げていくかというのはすごく難しいなと思って聞いていました。

(宮平委員長)

具体化も実現化も、何か似たような言葉が。

(山崎委員)

想像力みたいなことを言いたいんですかね、これは。どなたの発言からなんですかね。

(宮平委員長)

おそらく想像力じゃないのかなと思いますよね。

(山崎委員)

アイデアを実現する力で、これは含まれていますよね、ここに。アイデアを生む時に手持ちの情報だけって、逆じゃないですか、NGだと思うけれど。ちょっと違うかなと思いますけれどね。

(宮平委員長)

手持ちの情報だけではできませんからね。やっぱりいろいろとやらないと無理なことですよね。着想なのか構想なのか、思いつきなのかにもよって、またどんどん変わってきますので、最初にアイデアを生み出す力でいいと思います。3ポツ目を消して1ポツに、組織内で「心理的安全性」を作り出して、その結果アイデアが出てくるとのことだとすると、順番的に、組織内での「心理的安全性」が上位に来ます、1ポツですね。そして次に、2ポツ目で「アイデア力」です。「アイデア力」というのは、いろんなコミュニケーションとか、本を読んだりとか経験とか、いろんなものが合わさって出てくるはずですけども、これがお得意な人はどなたでしょうかね、「アイデア力」について考えをお示しできる委員は、はい、山崎委員、お願いいたします。

(山崎委員)

今、メモにも入れましたけれど、創造、イマジネーションの想像じゃなくて生み出す方の創造力なのかなと思っていて、僕たちはいつも既存の発想とか習慣にとられることなく、客観的な事実で情報分析をして、そこから新しい方法とかアイデアという「新しい価値」を生み出すということが「創造力」という定義をしています。

(宮平委員長)

遊びも重要ですよ、ある程度。心の遊び、言葉遊びでも冗談でもいいし。いろんなものが必要になってきますね。小島委員いかがですか、この辺りは。

(小島委員)

そうですね。すみません、すぐには。

(宮平委員長)

はい、わかりました。ありがとうございます。上地委員いかがですか、ここ。やっぱり社長とか経営者とか或いはいろんな方々には、世の中の必要な財やサービスを生み出すために「アイデア力」とか「創造力」なんかが必要だと思うんですけども。

(上地委員)

そうですね。これアントレプレナーシップは起業する際に必要な能力の一つだと思うんです。アイデアがあって、それを実現するために起業して、それを社会的に実現させていこうとするのが、まさにアントレプレナーだと思うんですけども、それがここで言っていることなのかなというふうに想像したんですけど、これが大きな組織、大きな企業の場合なら、そういうアイデア力をしっかりと表現できる或いはチャレンジできる「心理的安全性」を作っておかなければいけないということがここに書かれているのかなと。それがあ

れば、実現することも実行していくことも可能になるというふうに、私は理解をしていますけれど。

(宮平委員長)

わかりました。鯨本委員。鯨本委員が今のお立場に、離島新聞とかといったこと、アイデアを着想した頃のことを思い出していただきたいんですけども、その原動力となったのは何だったのでしょうか。

(鯨本委員)

そうですね。自分なりにローカルの事業主、起業家の皆さんの話を想像しながら見ていますけれど、このアントレプレナーシップ的なところに書かれているものは必要だと思いますし、書かれていることは大体必要なんですけど、そういえば無いなと思ったのが、「交渉力」みたいなものってどこかにありましたっけ。結局いろいろ決めても、パートナーとなりうる方ですとか、クライアントになりうる方とか、或いはお客様とかいろいろな方とお話をしていかなきゃいけないんですね、折衝したり、交渉したり。その力というのは非常に重要だったりする。コミュニケーション能力とも言えるんですけども、立場や業種によっても、特に求められるのは交渉関係の話かなというふうにちょっと思いました。だから、無いなと思いましたので、今挙げさせていただきました。

(宮平委員長)

これは実現する力の中に入りますよね。

(鯨本委員)

そうですね。

(宮平委員長)

「交渉力」ですね。やっぱり、いろんな表現の仕方によっても相手も心を揺り動かされたりしますからね。表現力が重要な感じがしますね。あと喜屋武委員ですね。今のお仕事をやろうと思ったときのことを思い出して、そこを説明いただけますか。

(喜屋武委員)

そうですね。発見する力とかというのもすごく大事だなと思っていて、私、上地委員と少しご縁もあるんですけど、昔、南大東島のラム酒の製造の立ち上げに関わっていたんです。どこにビジネスチャンスがあるのかというのは、実は自分の身の回りに宝物があるとか、どこにも負けないリソースがあるという資源とか宝物を発見する力とか、あと逆に、課題を発見する力というのがベースにあったかなと思っています。そこにこそ実はワクワクする、着

想が生まれたりとかするので、宝物や課題から、こんなふうにしたら誰々が喜んでくれるかもとか、みんなが幸せになるかもというのが、すごく私自身の仕事のモチベーションになっているなと思っています。

それをまたどう編集していったら、たくさんのファンが、あとはサポーターが、私たちのことを応援してくれるかなとか、そこに関わってくれた人がもっと応援してくれる人を集められるかなという編集する力もすごく大事なかなというふうに思いました。ということはヒアリングの時に話しました。

(宮平委員長)

そうすると、「アイデアカ」という源泉となっているのが、こんなのがあったらいいよなという、こんなことがあったらいいのにな、或いはこんなものがあったら、ドラえもののポケットみたいなものですか。

(喜屋武委員)

そうですね。そういうのとか、あと名桜大の学生さんとか琉大の学生さんと一緒にやっている時に、宜野座村の魅力発見とか課題解決からいろいろと大学生にアイデアを出してもらおうという時に、お困りごとを聞いたり、地元の人が当たり前と思っているところが実は宝ですよということを、エビデンスを入れてちゃんと伝える力というのがビジネスに繋がっていくのかなと思うので、そこはすごく大事なポイントかなと思っています。

(宮平委員長)

まずは、あったらいいな。あったらいいなというものを、次に、有木委員が述べていた「交渉力」ですよ。鯨本委員がおっしゃっている、あったらいいなというものを、シナリオみたいなものを作っていく。「交渉力」に含めますか。そうですね、「事業プロデュース能力」ですか。

(喜屋武委員)

そうですね。それはまた、プロデュース、見せ方ですよ。

(宮平委員長)

「事業プロデュース能力」も入れてください。そして、その「アイデアカ」と「アイデアを実現する力」の間に、事業構想能力ですね。先程の鯨本委員の話ですね。はい、「事業プロデュース能力」。

(喜屋武委員)

ちょっと、脱線するんですけど、この右側の教える人のところでも少しお話したんです



けれど、学校の現場の先生方が今お困りのところがカリキュラムマネジメントなんですね。今あるリソースをどんなふう融合して、どういうふう伝えていったら目の前の子供たちとかが、わくわくしたり、自己探求に繋がるかという研修を、今させてもらっているんですけど、そういうのはアントレプレナー精神と通ずるところがありますし、先程出ました編集する力とかプレゼンする力とか交渉する力に繋がっていくベースのところは今すごく、学校現場でも、教育界でも、経済界でも求められているんだなということはすごく感じます。

(宮平委員長)

なるほどね。あと、ここで、何か他に。有木委員どうですか。「アイデアを生み出し、具体化し、実現する力」の中で今、少しずつ付け加えているところですが。もう少しご覧になっていただいて、何かちょっと足りないなとか或いは付け加えた方がいいなというのがありましたら。

(有木委員)

私も長く今の会社にいるので、結構、自分の志向、やり方が決まっちゃっているんですけど、やっぱり「見立てる」、「仕立てる」、「動かす」というのが、すべての仕事を前に進めていく上で、その整理の仕方、見立てるとは何かというと分析するというので、ここに多分、先程、山崎委員がおっしゃっていたような、ファクトを捉えるとか、みたいな要素も入ってきますし、仕立てるというところには、「事業プロデュース能力」みたいなものが入ってきますし、最後の動かすというところに、この「交渉力」とか「実行力」みたいなところが入ってくるという三段活用なのかなというふうに、今聞いていて思いました。そこを細分化していくと、この枠では足りないぐらい、たくさん要素はあるんですけど、何かシンプルにまとめるのであれば、分析力、計画力、交渉力なのか、そういう感じになるのかなというふうに思います。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。新崎委員。

(新崎委員)

私の方では、最初の組織内での「心理的安全性」というのが、「何をおっしゃっても、皆さんで受けとめましょう」ということだということもあると思うんですけど、アイデアを発表いただいて、それに対して共感するとか、一緒に取り組む、協力するということも組織内で醸成していかないといけないのかなというのがありますので、「心理的安全性」だけではなくて、アイデアを出した方に対して、他の聞く方々に共感する力を持ってもらう、さらには一緒に協力して実現化していくという、相手先の力というか、求めるものも必要なのかなと思いました。

(宮平委員長)

まず、こんなことを言ったら、できないよとかネガティブな発言をしていたら、まず今の新崎委員がおっしゃっている「共感力」にはならないわけですよ。わかりました。ということは、「心理的安全性」だけではなくて「共感力」、もう一つが相手に対して、ブレインストーミングの中でよく出てくるんですけども、ある意味、上乘せしていく、アイデアとアイデアを重ねていく、そういったことが必要だということですね。はい、「共感力」ですね。次、金城委員いかがですか。

(金城委員)

私から発言するのがちょっと難しいところなんですけれども。すみません。

(宮平委員長)

いいえ。次、山崎委員いかがですか。このアイデアを生み出し、これが出てこないと稼ぐ力にも何もならないような、重要なところかなと思って、今こだわっているのですが。

(山崎委員)

これは、今、「立場や業種によって求められる能力」ということなので、全員が持っている必要はないという、アントレプレナーシップ的なところにフォーカスして協議しているんですよ。

(宮平委員長)

でも、これは結局、みんなが持っている「創造力」を出させないといけないし、「事業プロデュース力」を持っていないといけないし。アイデアを出すのは全員が持ってないといけないんでしょうけれども。立場、特に上司とかはそういうふうな心の安全性を作っていないといけないということで、こちらに盛り込まれているようですね。

(山崎委員)

そうですね。冒頭、有木委員がおっしゃったような、見せ方みたいなもの、ベースから成長して行って、特殊な層と伸びていく普通の人、またさらにステップアップする、レベルⅡ、レベルⅢみたいな見せ方もあるのかなと思いつつ見ていたんですね。結構複合的に、例えば立場や業種によって求められる能力が、じゃあ全ての人に求められないかということと求められると思うところもあるので、これを分けちゃうことによって、ちょっと残念な部分も感じられるし。自己主体的に自分ごとにして、やるかやらないかを自分で決めて進めていくというのは、全ての人に求められるし、できない理由でやめるのではなく、どうすればできるかを考える思考とか、アントレプレナーシップとは言われるんですけど、人生におい

でも大事なかなと思ったりするので、分けるのが、さっきからうーんと思いながら聞いていました。

(宮平委員長)

なるほど。今言っているような、アイデア出す力だとか「諦めない力」だとか「変化対応力」だとか、「リーダーシップ」、「判断力」、これはここじゃなくてこれから社会で生きていく上では必要な力というふうに見た方がいいということですね。

(山崎委員)

基礎、初級、応用編みたいに、分けてあった方がいいのかな。

(宮平委員長)

はい、わかりました。小島委員いかがですか。

(小島委員)

ちょっと分け方については、再度、整理が必要なのかなと思ったのと、最初ちょっと言えなかったところで、皆さんの話を聞いていて、こんなのかなと思いついたところを言っても大丈夫ですか。

(宮平委員長)

はい、どうぞお願いします。

(小島委員)

チームでプロジェクトをまわしていく力というのも重要なのかなと思っていて、そこは「交渉力」だったり「コミュニケーション力」だったりということにも含まれると思うんですけど、一方で、自分がリードする、自分が分担するのではなくて、ちょっとネガティブなところもあるんですけど、「頼る力」、うまく人に任せちゃう力みたいな、私もお願いするより自分でやってしまうことが多くて反省するんですけども、部下に任せるとか、頼るとか、そういうのも能力としてあるのかなというふうに思いました。いかがでしょうか。

(宮平委員長)

ここは下の方に、「他者の長所を見抜き、受入れ、協働する力」というふうなところですね。その中に含めていっていいんじゃないでしょうかね。

(小島委員)

はい、ありがとうございます。

(宮平委員長)

頼る力ですね。特に今は、先程、山崎委員が言っているように、日本の教育の中では、全部できなきゃ悪い子みたいなところがあって、頼らないんですよ。そうすると学生の中でも、頼らないものだから、キャメルクラッチングになってしまって、つぶれてしまうのがいちゃうんですね。だから、全部が全部できることはないから頼りなさいというようなことを、僕なんかはよく言っているんです。そうですね、確かにその通りです。「頼る力」ですね。平良副委員長いかがですか。

(平良副委員長)

すみません、分け方は私もちょっとアイデアとして持ち合わせていないんですけれども、とても重要だなというふうに感じましたが、喜屋武委員がおっしゃっていた「気づく力」のところなんですけれども、やはり便利な世の中になってきているので、何が今、問題になっているのか、何が今不便になっていることなのかということに気づかない、気づきづらい世の中になっていると思います。情報や物が溢れていて、世の中、生活することにそんなに困っていないというところに対して、何が問題なのか、何が課題なのか、何に困っているのかということに如何に気づけて、そこに新しいビジネスチャンスが生まれるのかという、この「気づく力」というのは、本当に私たち企業の中でも常に言われていることなので非常に重要だなと思います。

ですので、まず世の中の課題に気づかないことには、そこに関連するビジネスアイデアというのはなかなか生まれてこないというのが一つ。もう一つ、生み出したアイデアを他のアイデアとかけ合わせる。ここで言うところの「創造力」に加えて、「共創力」、共に創る共創なんですけれども、そういった考え方も非常に重要なのかなというふうに感じております。業務と業種とをかけ合わせて新しいビジネスモデルを作っていくんだということを考えると、何かチャンプルーみたいな、沖縄の文化にもかけ合わせられるのかなというふうに思いました。ちょっと、皆様の意見を聞いて感じた私の補足意見となります。以上です。

(宮平委員長)

今のところに、もう一つは「気づく力」ですね。「アイデア力」、「気づく力」。「アイデア力」は気づかないとアイデアは生まれてこないということですので、まず「心理的安全性」を作って、「気づく力」ですね。「気づく力」のためには、やっぱり自分ごとのように考えるというのが必要になってきますよね。自分ごとのように考えるって、ここが学生を教えていて非常に難しいんですよ。これがなかなかできなくて、どうしようと常日頃考えているのですが、ちょっとこれ私事ですみませんが、これ、なかなか難しいですね。平田委員いかがですか。

(平田委員)

ちょっと所々しか聞いていないんですけど、今そこに一つアレンジする力というんでしょうか、前から僕が少し話しているんですけど。いわゆる、僕らが取組をするときに、よく新しいアイデアとかという見られ方をするのですが、例えば現代版組踊みたいなものは、もともと組踊という古いものがあって、それを、いわゆる今の人たちにインパクトがある形で伝えるためにアレンジをするわけですよね。元のゼロから生み出すんじゃなくて、すでにあるものをかけ合わせる力というんでしょうか。それは編集能力だったりとか、調整能力だったりとか、或いは、まさにアレンジする、ディレクションする力だと思うんですけど、そういう力が長けている人は、例えばその地域にあるAとBの素材を生かして、新しいCを生み出すという力になると思うんですね。全くのAを生み出す人、Bを生み出す人たちを、またさらにかね合わせでCを生み出すというような、そういう力と言うならば、アレンジする力というような要素というのは、ちょっと必要不可欠かなと。特にファシリテートとか或いは地域のプロデューサーであるとか、特に演出家なんていうのは本当にアレンジする力なんですよ。ですから、もともとある地域の素材を生かして、ある意味、見せ方を変えて新しい魅力、パワーを生み出していくという意味では、そういう人間力というのは必要なんじゃないかなと個人的に思いますが、いかがでしょうか。

(宮平委員長)

そうですね。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を現代版にしたのが、例のバーンスタインの『ウエストサイドストーリー』ですね。だから、これは新しい息吹を与える、何かの息吹を与えるのかな。いろんなものに息吹を与える。だから、「気づく力」と「共創力」と「アイデア力」を事業プロデュースしていくという感じかな。

(平田委員)

よく地域プロデューサーとか何とかプロデューサーとかよく言われているプロデューサーという言葉が独り歩きはしていて、結構いい意味で、いろんなところで使われているんですけど。

(宮平委員長)

そうですね、鯨本委員どうですか。離島の振興とも考え合わせていくと、やっぱり離島になるといろんな人、多面的ないろんな人の複合体でやっていくわけですよね。離島振興で、例えば「気づく力」、「アイデア力」、「共創力」、「プロデュース力」、「アイデアを表現する力」、「実行力」、「アレンジする力」。あと何か。

(鯨本委員)

「事業プロデュース能力」的な職能が正しく理解された上であれば、そこに全部が集約されます。

(宮平委員長)

集約されますか。

(鯨本委員)

集約されてしまうんですけれども、それを分解して言おうとすれば、例えば、あえてよく使われている言葉で言えば、事業のデザインだとか、事業編集だとか。私は自分が編集者という立場もあるので、編集という仕事も結構、人に説明するのは難しい仕事ではあるんですけれども、地域によっては、すべてにおいて新しくいろんなものを作る必要がないんですよ。もともとあるものを生かして、それを少しアレンジするようなことだけで事足りることもあるんですよ。地域の課題に対して何でも新しく作らなければいけないということでもないんですね。ですからもともとあるものに関して、その価値をしっかりと見出した上で、足りないものだけを補うような、そういった編集的な考え方で仕事をしていただける方がいいなというも思っているんですけれどもそれも、「事業プロデュース能力」を正しく言語化できれば、それだけでも足りる能力でもあります。

(宮平委員長)

はい、わかりました。上地委員いかがですか。

(上地委員)

今、鯨本委員や平田委員がおっしゃったことと、ほぼ一緒なんですけれども、やはり「アレンジする力」というのはとても大事だと思うんです。私自身は全く何もないゼロの状態から生み出すことというのは、ほぼないと思っているんですよ。いろんな地域などに行っても、先程ちょっと南大東のラム酒の話がありましたけれども、サトウキビがもともとあるわけで、そのサトウキビをどうやって生かしていくかと考えたときに、島の人たちがラム酒ということを考えたりしたかと思うんですね。

やっぱり今コロナで、これまでのビジネスが成り立たなくなったので、事業を見直そうということで、国の方も事業再構築補助金とかを出してはいるんですけれども、これは、もともと持っている経営資源、それぞれの企業、会社、或いは個人のお店が持っている経営資源を生かして、今までのマーケットとか今までの商品ではない、新たな商品にしていく、それで実際に稼いでいくんだというようなスキームなんですね。我々はずっとこの2年間、そういうことを提案してきていて、恩納村でずっと観光客相手に小さな宿泊を運営していたところが、全く沖縄に来なくなったので、「じゃあ何があるの」と、「おたく、何を持っているの」と言ったら、すごくおいしい料理を作ると。これはお客様にも人気があったので、それ

を活かしましょうということで、非常に少額で冷凍機を買って、それで冷凍して、お客さん向けにネット販売をやったわけですね。そしたら注文がかなり増えて、しかも定期的に増えたので、一年に一回来るお客さんよりも、すごく売りが上がったというようなこともあって、これももともと持っているもの、先程、鯨本委員がおっしゃったようにもともとあるものの価値を活かすということだと思いますし、平田委員がおっしゃった、あるものをアレンジして、編集して価値を出していくということだと思いますので、そういうことが、このアイデアを生み出し、具体化し、実現するところの趣旨なのかなというふうに思ったのですが。以上です。

(宮平委員長)

あと、もう一つちょっと気がかりなのが、様々な中小企業とかいろんなコンサルに頼むんですけれども、コンサルテーションをやっている方々が独善的になってしまったら非常に困るなというところがあって。

(上地委員)

あります。それは、確かにあります。

(宮平委員長)

ありますよね。この辺、お互い話し合いながら、より良い方向に向かっていくようなところが無いといけないのかなというふうに考えたりしますね。

(上地委員)

自分の専門性を押し付けるコンサルが多いんですよ。

(宮平委員長)

多いですよ。あともう一つ、短期・中期・長期、これはよく喜屋武委員が話しているんですけれども、その三つの視点も重要なのかなと思うんです。要するに、沖縄の言葉で言うと、「なまなまー」という言葉、上地委員はよくわかると思うんですけれども、これをやったら立ち行かなくなるのかなと。よくいろんな話を聞いていると、押し付けないという、これはネガティブな言い方ですけども、そういったことをやらないというのと、やっぱり短期的な視点で物事を見ないという、これもやっぱり必要なのかなと。ある意味、育てる力になってきますかね。

(上地委員)

そうですね。

(宮平委員長)

はい。そういったものが、この中にも含まれていいのかなというふうに感じたんですけども、他の先生方、どうですか。私の経験上、そういうふうなのが。上地委員いかがでしたか。押し付けるとか、他の人たちもコンサルだけに頼ってしまっただけで言いなりになってしまっただけで、良さを見出しきれないという事例もあつたりして、困ったなというところがあつたりするんですけど。

(上地委員)

実際に、コロナの中での対応というのものすごく今、増えているんですけども、最初にはコロナが発生した2020年というのは、皆さん、アフター・コロナという言葉を使っていたんですよ。しかもアフター・コロナという言葉の中には、半年後にはコロナを克服できているというのがあって、これは皆さんが融資を受けたときの返済の据え置き期間を半年から1年にしているのが多いんですね。2年以内というのが6割いるんですよ。つまり、本当に「なまなまー」で、喉元過ぎれば、じゃないですけど、そういう対応をしていらっしゃる方々が多かったので、その方々に対しても「違いますよ。これはアフター・コロナではなくてウィズ・コロナで考えていかないといけないですよ」と。当面の解決策はこういうふうに、まずは出血を止める、資金繰りをするとか、そういうことから始めて、次に、中期的には今持っている資源を使って、ビジネスでしっかり収益を出す。そして長期的に持続するような、自分たちの事業そのものを再構築していくということが、一番問われている今のコロナの状況なんですね。そういうことが必要なのが、まさに、ここにある「アイディア力」であつたり、「アレンジ力」であつたり、「プロデュース力」であるのかなと思います。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。もう一つは短期・中期・長期の視点で物事を見る力も重要かなというところですね。他に、鯨本委員、離島地域とかを念頭に、今やっていたところなんんですけども、付け加えるところは。或いは他の委員でも結構でございます。はい、どうぞ、山崎委員お願いします。

(山崎委員)

僕が言うのも変ですけど、沖縄らしさの人材育成と考えたときに、高いレベルの調和というのも大事かなと思って。どうしてもビジネスの世界は勝つか負けるかみたいのがあって、競合に勝つみたいなものがあると思うんですけども、地域とか日本とか世界というレベルで、ここと組んだらどうできるかとか、地域連携をしようと、「和を以て貴しとなす」ではないんですけど、そういう精神を日本人は持っていると思うんですよ。それが沖縄はすごく強くあると思うので。



(宮平委員長)

はい、どうぞ。次どなたかどうぞ。他に、「調和」ですね。

(山崎委員)

沖縄の言葉でいいですよ。なんかいいですか、そういうキーワード。

(宮平委員長)

うちなぐちで調和。何かありますか、新崎委員。

(新崎委員)

なかなか、わからないですね。

(宮平委員長)

なかなか難しいですね。上地委員が言った「あじまー」みたいなものですね。他にどうぞ、ございましたら。よろしいですかね。あとは大体いいかな。あともう10分程度です。ここは特に、アイデアを出さないことには、稼ぐ力には繋がらないし、ということでちょっとこだわってみました。次の6ページ目、7ページ目をちょっと見て。

あとはプラットフォームですね。ここは結構やりましたか。プラットフォームづくりですね。振り返ってみて、教育機関との連携。先程、異なる学校に興味のある授業を学びに行ったりするというので、私の提案としては先程言ったように、自由科目を作って他の学校で学んだものを単位として認めるとか、こんなこともあるのかなというところですね。他には関係機関ですね。特に重要なポイントは何かというと、徹底的に話し合うということが重要ですよということでした。徹底的に議論し、それに合った教育プログラムを作っていくということですね。あとは他にプラットフォーム。小島委員、プラットフォームで何か参考となる事例があったら教えていただきたいんですけども。

(小島委員)

プラットフォームは、もうずっとまだまだと言っていますけれど、あまりここがいいですというのがなくて、ぜひ学ぶ場、先程来ずっと出てきている、こういう能力が必要だということを、実際プラットフォームで共有し、ビジョンを共有するだけじゃなくて、実際に一緒に取り組んでいく場に、「何々×何々」がなっていければいいのかなというふうに思っています。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございました。平田委員どうぞ。

(平田委員)

ちょっと調和の言葉はぱっと思いつかばないのですが、先程のプラットフォームのところで1個、別視点になるんですけど、今、これは例えば横断的な部局を県の中に作るという話があるじゃないですか。もし、どこまで書きぶり、行けるかわかりませんが、可能であれば市町村との調和というか、連携がかなり必要だなと。つまり、県の中で、横断的な部局をつくったとして、同じようなことが市町村の中でも、部局づくりとか部編成がなされなければ、結局動いていかないのかなという気も若干します。というところで、これは沖縄振興審議会の中でも言ったんですけども、ぜひ市町村との連携というところに関しては、かなり強く調整をして欲しいなという感じがあります。この1点だけ付け加えさせてもらいたいです。意見でした。

(宮平委員長)

ここを、特に小規模市町村の場合には人材の不足があるので、できれば県の方から応援部隊みたいなものを持ち込まないと、かなり難しいなというのが私の経験上あります。特に竹富町なんかというのは離島に分かれているので、結構大変な事務作業が必要になってきていますね。

では、次ですね。上地委員、このプラットフォームなんですけれども、産業振興公社なんていうのは、ある意味プラットフォームだと私は見ているんですけども。どうでしょうか。

(上地委員)

そうですね。こういう機能を県がどこかに持たせようと思ったら、いつも便利に使うのが産業振興公社なんですけれども、ここに書かれていることを実現できるかどうかというのはまだわかりませんが、先程、委員長がおっしゃった、県から人材を派遣して応援することは絶対に必要になってくるのかなと思います。また、県の方も、自分たち、県だけではなくて、国の方からもそういう人材の応援を確保していくというか、そういう取組がこのプラットフォームを作っていく場合に必要なのかなというふうには思います。

(宮平委員長)

はい、ありがとうございます。鯨本委員、何かプラットフォームづくりで参考となる事例がありましたら。

(鯨本委員)

そうですね。特に人材が少ないところへの人材支援という考え方はもちろん必要なんですけれども、このときに、例えば応援に来ましたという形で、県の人が地域に入る場合、結構、地域側で変なお客様感といいますか、来る人の雰囲気によっては、ものすごく嫌な感じ

になってしまうところを、ちょこちょこ見かけるんですよ。ですので、ただ単に派遣するというよりかは、この会議体で学びについての話をしているように、県の方々が地域に行かれるのであればローカルを学ばせていただくみたいな学びの形で行ってはどうかと思うんですよ。結局お互い学び合いなんですよ。県の方であればローカルをリアルに知るという機会にはなりますし。県の方々には優秀な方がたくさんいらっしゃるの、その代わりに地域へ能力を提供するというような、WinWinの形での交流ができると理想かなと感じます。

(宮平委員長)

いいですね、その通りですね。やっぱり人間は理屈抜きで感情も出てきますからね。感情がこじれてしまったら、修正がものすごく大変になってきますのでね。その辺、鯨本委員がおっしゃっている、別にこれは県の職員だけじゃなくて民間企業の方でもいいし、民間の方でもできることです。だから、これがプラットフォームになると思うんですけども。そういうところを活用するというのも重要なと思います。喜屋武委員いかがですか。

(喜屋武委員)

今の話、大きくうなずいていまして。私は、県の命題を背負って、いろんな離島とかに行って、「こういう仕組みやりましょう」と言うと、まず机をバーンとなるところから始まっちゃうので、「敵じゃないですよ」という、そのコンセンサスをどう取っていくのかと。ただ、「こういうことをやってください」とか「やりましょう」ではなくて、まずこのコンセンサスを取るには、その地域の皆さんの良いところだったり、こう伸ばしたらどうなのかということ、本当にその村民、町民にもなる、住民票を移していないけれど、私はその地域の人ですよということから始まって私も今ここにいる感じなので、やっぱりそういうのはすごく大事で、一緒に汗をかいて、決してそこを私の意見だけで進めないということがすごく大事なので、それをまた企業の皆さんだったり、たまには県外の方のそういう力を借りるにしても、その懐にどう入っていくかというタイミングとかがすごく大事だと思うので、プラットフォームづくりは、そこを意識した上でどうコーディネーターを養成していくかということもとても大事ななというふうにも思います。

(宮平委員長)

これは鯨本委員もおっしゃっていましたが、やっぱり優秀なプロデューサーを送り込まないと、この優秀の意味は、今喜屋武委員とかがおっしゃっているような、高飛車なものではなくて、一緒に学ばせてくださいという謙虚な姿勢の方が良いということですね。上地委員なんかその辺、非常にベテランだと思いますので。一言二言なりに教えていただきたいんですけど。

(上地委員)

場数を踏んでおりますが、私も沖縄だけではなくて全国のいろんな地域に行くときには、必ずその歴史や文化を自分なりに勉強してから行くんです。そうすると、とてもコミュニケーションしやすいんですね、ずっと入っていけるというところもありますので。やっぱり地域に関わる場合には、県から送り込むにしろ国から派遣してもらうにしろ、とにかく、その地域のことをちゃんと理解してから行かないと大変なことになるかなと思います。

(宮平委員長)

ということで、お互いに学び合うというような謙虚な姿勢が重要だということですね。山崎委員いかがですか。

(山崎委員)

私が今やっている取組の宣伝みたいになっちゃうのも嫌なんですけれど、プラットフォームになりたいと思っているんですよね。人材育成を通じて未来を作るということで、まさに実はこの3月の下旬に「LEAP DAY」というイベントをやるんですけれども、人材育成に関心を持っている皆様には、ぜひ見ていただきたいなと思っていたりして。本当に、県がとか誰がとかじゃなくて、立場とかそういうのをすべて超えて、一緒になって未来を考えるみたいな、答えを出さないんですけれど、問題提起をそこでいっぱい投げるといような状況を、このイベントで作っているんですけれども。ちょっとだけ画面共有してもいいですか。

(宮平委員長)

どうぞ。

(山崎委員)

今、見えていますかね。今年、実はイオンモールライカムでやることになりまして、水槽の前の吹き抜けのところなので、入場料とか完全に無料にして買い物かてらにちょっと見てぱっと気づいてもらうという、そういう偶発性をすごく大事にしました。2日間あるんですけれど、例えば1日目ですと、すごいゲストが。今回初めて沖縄に来るんですけれど、クロスリアリティ、わかりますか。VRとかの先を行っているやつですね。クロスリアリティとかで、今、坂本龍一さんとかとコラボしたりとか、渋谷の駅前を大々的に変えたりするようなXR境界では非常に有名な山口さんが今回来ます。その生き方とかも含めて語っていただいたりするんですけれど。あとは、SDGs的に興味がある方とかであれば、環境活動とかを全国で講演している露木しいなさんとかも来ます。あとは、共感資本社会ということで新しい、次の資本主義みたいなところの話を、昔、鎌倉投信の代表だった、現eumoの共同代表が来られたり。あとは『ハートドリブン』という本を出している塩田さん、この方も今回沖縄初だと思えるんですけれど、皆さん、マネードリブンというか、どう儲けるかとか、どう出世するかという思考の中で、いろいろな人材育成とか評価制度がある中で、ハー

トで本当に生きていいのかみたいなどの定義づけですよね。そういうのがこのセッションにあったり。

2 日目は私がやっている学生向けの取組なんですけれど、琉大の方からも出てきたりとか、あとは、今、連携の学生団体がいろいろとあるんですけれど、マイプロジェクトとか高校生とか、そういったところの教育プログラムの発表もありつつ、Frogs の発表もありつつみたいな感じで構成しています。なので、土日どこか時間があったら、こんなことをやっているというところで、ぜひ皆さん、見ていただきたいなと思っています。なんか宣伝に来たみたいになっちゃって申し訳ないんですけれど、ぜひそういうプラットフォームになっていきたいと思っています。

(宮平委員長)

いろいろと先程お話がありましたように、まだプラットフォームという概念自体がまだまだということですので、作り上げながらやっていければいいかなと思います。ありがとうございました。

ということで時間となりましたので、いろんな話はこれで終わりにして、事務局の方から何かありますか。

(事務局)

はい、ありがとうございました。本日のご議論というかご意見を踏まえて、またちょっと大幅にリバイスしていこうかなと思っています。最後に、こちらの県庁の窓口となっていていただいております企画調整課さんの方から一言ご挨拶があるということなんですけれど。

(沖縄県企画調整課)

沖縄県企画調整課でございます。お世話になっております。すみません、本日、実はちょうど今隣の会議室で全国知事会をやっておりまして、うちのメンバーがそっちにも行って、私の方でご挨拶させていただくことになっておりますけれども、よろしく願いいたします。

今回、大変幅広い議論をしていただいて、しかも2回も事前のヒアリングということもさせていただいて、皆様には本当にお世話になっております。ありがとうございます。本日の意見も踏まえて事務局の方で取りまとめる作業がありますので、大変恐縮ですけれども、しばらくの間、おつき合いをいただければというふうに思っております。

最後にご案内だけなんですけれども、昨年度もありましたけれども、今年の報告書、提言書の方を知事へお渡しする手交式について、今、知事との日程調整中でございますけれども、現在のところ3月29日の10時からの予定でございますけれども、その方向で日程を調整しているところでございます。そのご案内については改めてメール等で差し上げようと思っておりますけれども、もし委員の皆様、日程が合えばぜひご参加いただきたいというふう

に考えてございますので。ただ、対面になるかリモートになるかというのは状況も踏まえてということでございますけれども、またご連絡させていただきますので、引き続きよろしくお願いたします。以上でございます。ありがとうございます。

(事務局)

ありがとうございました。事務局からの連絡等々は以上でございます。

(宮平委員長)

では取りまとめて、先程お話がありましたように、委員の先生方にはその内容をお配りして修正をかけていって、私と平良副委員長の方で責任校了という形になるのかな。ということでまとめさせていただきたいと思います。議事録、そして内容を委員の先生方、年度末でお忙しいところ大変申しわけございませんけれど、ご確認の上、修正等ございましたらご連絡いただきたいと思います。本日はどうも長時間にわたり熱心なご討議ありがとうございました。これにて終了したいと思います。ありがとうございました。

(以上)